高梁市埋蔵文化財発掘調査報告第２集

陣山遺跡
本郷遺跡

1999年3月

岡山県高梁市教育委員会

（題字は鎌木英子氏の揮毫による）

高梁市埋蔵文化財発掘調査報告第２集

陣山遺跡
本郷遺跡

1999年3月

岡山県高梁市教育委員会

1.　陣山遺跡遠景（東より）

2.　陣山遺跡表面採集石器

1.　本郷遺跡遠景（東より）

2.　本郷遺跡表面採集遺物（特殊器台）

序

岡山県の中西部、備中のほぼ中央に位置する高梁市は、高梁川の中流域に開けた城下町です。県下三大河川のひとつである高梁川とその支流に育まれた市域は、県南の平野と中国山地の間に横たわる「吉備高原」の一角を占め、気候は温暖で、美しい自然にめぐまれています。こうした自然環境が、城下町として発展を遂げた本市の礎となっており、市内には、原始・古代の先人たちが残した数多くの形跡をとどめております。その最たるものが、今回報告いたします陣山・本郷の両遺跡です。

陣山・本郷の両遺跡は、昭和50年に市史編纂にかかる学術調査として、高梁市史編纂委員であった故鎌木義昌先生（当時岡山理科大学教授）にお願いして調査していただいた遺跡です。陣山遺跡の調査では、残念ながら明確な遺構の確認こそなかったようですが、すでに採集されていた遺物から岡山県の重要遺跡に指定されています。また、本郷遺跡からも埴輪の祖型といわれる特殊器台・特殊壺の出土を見ており、両遺跡とも単に高梁市の地域史のみならず、日本における極めて重要な遺跡と認識しております。

平成９年、高梁市文化交流館内にあります歴史美術館の整備に伴い特別展「高梁の歴史と文化」を開催し、同遺跡の紹介に供じましたところ、大変な反響をいただき、本報告書発刊の契機となりました。

今回の報告にあたりましては、先生の奥様の英子様から調査記録や写真、図面類のご提供をいただき、当時、学生として両遺跡の発掘調査に参加された岡山理科大学自然科学研究所の白石純先生に、報告書の執筆をお願いいたしました。両氏とも快くお引き受け下さり、今回の発刊の運びとなりました。本報告書が、遅ればせながら地域の歴史を紐解く一助となればと期待しております。

最後になりましたが、両遺跡の調査にご尽力を賜りました故鎌木先生のご冥福をお祈りいたしますとともに、ご協力を賜りました鎌木英子氏、また、本報告書作成に献身的なお骨折りを頂きました白石先生をはじめ、関係者各位に心より厚くお礼申し上げ序文といたします。

1999年３月31日

高梁市教育委員会
教育長　長　船　勝　巳

例　　言

1. 本報告書は、1975年（昭和50年）に市史編纂にかかる学術調査として実施された陣山遺跡、および本郷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 陣山遺跡は高梁市松原町字陣山2716－1、本郷遺跡は高梁市宇治町字本郷524に所在する。
3. 陣山・本郷両遺跡の発掘調査は高梁市教育委員会の依頼により瀬戸内考古学研究所（所長　故鎌木義昌）が実施した。
4. 遺跡・遺構の実測図の作成および写真撮影は、調査参加者全員で行った。
5. 遺物の整理作業は、岡山理科大学考古学研究会会員全員で行った。
6. 遺物の実測は白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）と谷山雅彦（総社市教育委員会）が分担してあたり、遺物の製図、写真撮影は白石が行った。
7. 遺構の製図は白石が行った。
8. 本報告書の執筆は、第１章を森　宏之（高梁市教育委員会）、その他を白石が担当した。
9. 本報告書の編集は白石、森が行った。
10. 本報告書に用いた方位はすべて磁北で、高度はすべて海抜高である。
11. 本報告書に使用した地図のうち第１図は国土地理院発行の1/50,000地形図を複製、加筆したものである。
12. 第５章１の本郷遺跡出土土器の胎土分析は、岡山県古代吉備文化財センターとの共同研究である。
13. 本報告書の作成にあたり、次の方々にお世話になった。記して感謝の意を表します。
    宇垣 匡雅、鎌木 英子、亀田 修一、草原 孝典、小林 博昭、葛原 克人、高橋　護、高畑 知功
    中野 雅美、平井 泰男、広金 一男、福田 正継、正岡 陸夫、光石 鳴巳
14. 本報告書に関係する遺物・図面・写真類等は、高梁市教育委員会（岡山県高梁市松原通2117－1）に保管している。

目　次

第１章　位置と地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２章　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　１　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　２　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　３　謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第３章　陣山遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　１　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　２　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　３　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　４　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第４章　本郷遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　１　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　２　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　３　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　４　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第５章　出土遺物の自然科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　１　本郷遺跡出土土器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第６章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

挿図目次

第1図　周辺の遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第2図　陣山遺跡調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第3図　陣山遺跡土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7・8
第4図　陣山遺跡出土遺物1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第5図　陣山遺跡出土遺物2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第6図　陣山遺跡表面採集遺物1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第7図　陣山遺跡表面採集遺物2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第8図　本郷遺跡調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第9図　本郷遺跡検出遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17・18
第10図　本郷遺跡1区、2区第Ⅰ層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第11図　本郷遺跡3区第Ⅱ層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第12図　本郷遺跡土器群1出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第13図　本郷遺跡土器群2出土遺物① ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第14図　本郷遺跡土器群2出土遺物② ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第15図　本郷遺跡土器群3出土遺物① ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第16図　本郷遺跡土器群3出土遺物② ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第17図　本郷遺跡土器群3出土遺物③ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第18図　本郷遺跡土器群3出土遺物④ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第19図　本郷遺跡土器群4出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第20図　本郷遺跡表面採集遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第21図　本郷遺跡出土遺物（特殊器台） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第22図　K－Ca散布図　本郷遺跡出土土器の器種による比較 ・・・・・・・・・・・・34
第23図　K－Ca散布図　本郷遺跡と他遺跡出土の特殊器台の比較 ・・・・・・・・・・34

表目次

第1表　陣山遺跡出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第2表　胎土分析試料一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

図版目次

巻首図版1－1陣山遺跡遠景（東より）
　　－2陣山遺跡表面採集石器
巻首図版2－1本郷遺跡遠景（東より）
　　－2本郷遺跡表面採集遺物（特殊器台）

図版　1－1　陣山遺跡調査風景（西より）
　　－2　陣山遺跡調査風景（東より）
　　－3　陣山遺跡発掘区風景（東より）
図版　2－1　陣山遺跡第1トレンチE区南西壁断面
　　－2　陣山遺跡第1トレンチE区南東壁断面
図版　3－1　陣山遺跡縄文土器出土状況
　　－2　陣山遺跡押型文土器出土状況
　　－3　陣山遺跡羽状縄文土器出土状況
　　－4　陣山遺跡スクレイパー出土状況
　　－5　陣山遺跡石器出土状況
　　－6　陣山遺跡尖頭器出土状況
図版　4－1　陣山遺跡表面採集石器（表）
　　－2　陣山遺跡表面採集石器（裏）
　　－3　陣山遺跡出土スクレイパー（表）
　　－4　陣山遺跡出土スクレイパー（裏）
図版　5－1　陣山遺跡出土石器（表）
　　－2　陣山遺跡出土石器（裏）
図版　6－1　陣山遺跡出土縄文土器（表）
　　－2　陣山遺跡出土縄文土器（裏）
図版　7－1　本郷遺跡遠景（南より）1999年5月撮影
　　－2　本郷遺跡近景（東より）
　　－3　本郷遺跡近景（北東より）1999年5月撮影
図版　8－1　本郷遺跡調査区設定（北より）
　　－2　本郷遺跡調査区設定（南西より）
　　－3　本郷遺跡調査風景（北より）
図版　9－1　本郷遺跡調査風景（北より）
　　－2　本郷遺跡調査風景（南西より）
　　－3　本郷遺跡調査区土層断面（西より）
図版　10－1　本郷遺跡石列出土状況（北より）
　　－2　本郷遺跡石列出土状況（西より）
　　－3　本郷遺跡3区土器出土状況（西より）
図版　11－1　本郷遺跡土器群2出土状況（南より）
　　－2　本郷遺跡土器群3出土状況（西より）
　　－3　本郷遺跡土器群3出土状況（西より）
図版　12　本郷遺跡1区、2区第Ⅰ・Ⅱ層出土土器
図版　13　本郷遺跡3区第Ⅱ層出土土器
図版　14　本郷遺跡土器群1、2出土土器

図版 15　本郷遺跡土器群２、３出土土器
図版 16　本郷遺跡土器群３出土土器
図版 17　本郷遺跡土器群３、４出土土器
図版 18　本郷遺跡表面採集および出土特殊器台
図版 19　本郷遺跡出土特殊器台
図版 20　本郷遺跡出土特殊器台

第1章　位置と地理的・歴史的環境

陣山遺跡・本郷遺跡は、岡山県高梁市に所在する。高梁市は岡山県の中西部、備中のほぼ中央に位置し、東は上房郡、西は川上郡、南は総社市、北は新見市に隣接する。市域は県南の平野と県北の中国山地の間に横たわる「吉備高原」と呼ばれる準隆起平原の一角を占め、総じて西に高く東に低い地勢で、県下三大河川のひとつである高梁川とその支流にあたる有漢川・成羽川などに沿って形成されたわずかな谷底平野と標高300～500mの高原からなる。面積は県下第4位の約230㎢を有するが、その約77%を山林、原野が占めている(1)。

市のほぼ中央を貫流する高梁川は、その源を新見市千屋の花見山に発し、流路延長は約120kmにおよぶ。新見市を縦断し、高梁市に入って有漢川・成羽川を合流、総社市に入って肥沃な総社平野を形成しながら倉敷市玉島で瀬戸内海に流入する。古くから備中地方の有力な交通手段として積極的に利用され、昭和3年の伯備線の開通までこの川を往来する高瀬舟が物資輸送の主力として活躍していた。また、高梁川本流沿いにはＪＲ伯備線および国道180号、有漢川－高梁川－成羽川沿いには国道313号が通っており、これら国道はいずれも山陰と山陽を結ぶ旧街道を踏襲したものと考えられることから、高梁市は水路とともに陸路の結接点、交通の拠点であったといえる。

前述したように市域のほぼ中央を高梁川が貫流しているため、高梁市は地勢的に東側の旧上房郡にあたる中井町・巨瀬町・川面町・津川町・旧高梁町と西側の旧川上郡であった宇治町・高倉町・松原町・落合町・玉川町に二分される。当該両遺跡は、このうちの高梁川西岸、旧川上郡系の松原町・宇治町に所在し、吉備高原の西端に近い高原上に位置する。市域一帯の地質は、中世代後半～末期（白亜期）あるいは新世代第三期の火山活動による貫入岩からなる。基本的には市街地を中心とした高梁川東岸が黒雲母・カリ長石・斜長石・石英などから構成される黒雲母花崗岩地帯であるのに対し、高梁川西岸にあたる松原町には安山岩、宇治町には流紋岩が分布する。なかでも陣山遺跡が所在する松原町陣山地区は、古期安山岩の風化による黒ボク地帯となっている(2)。

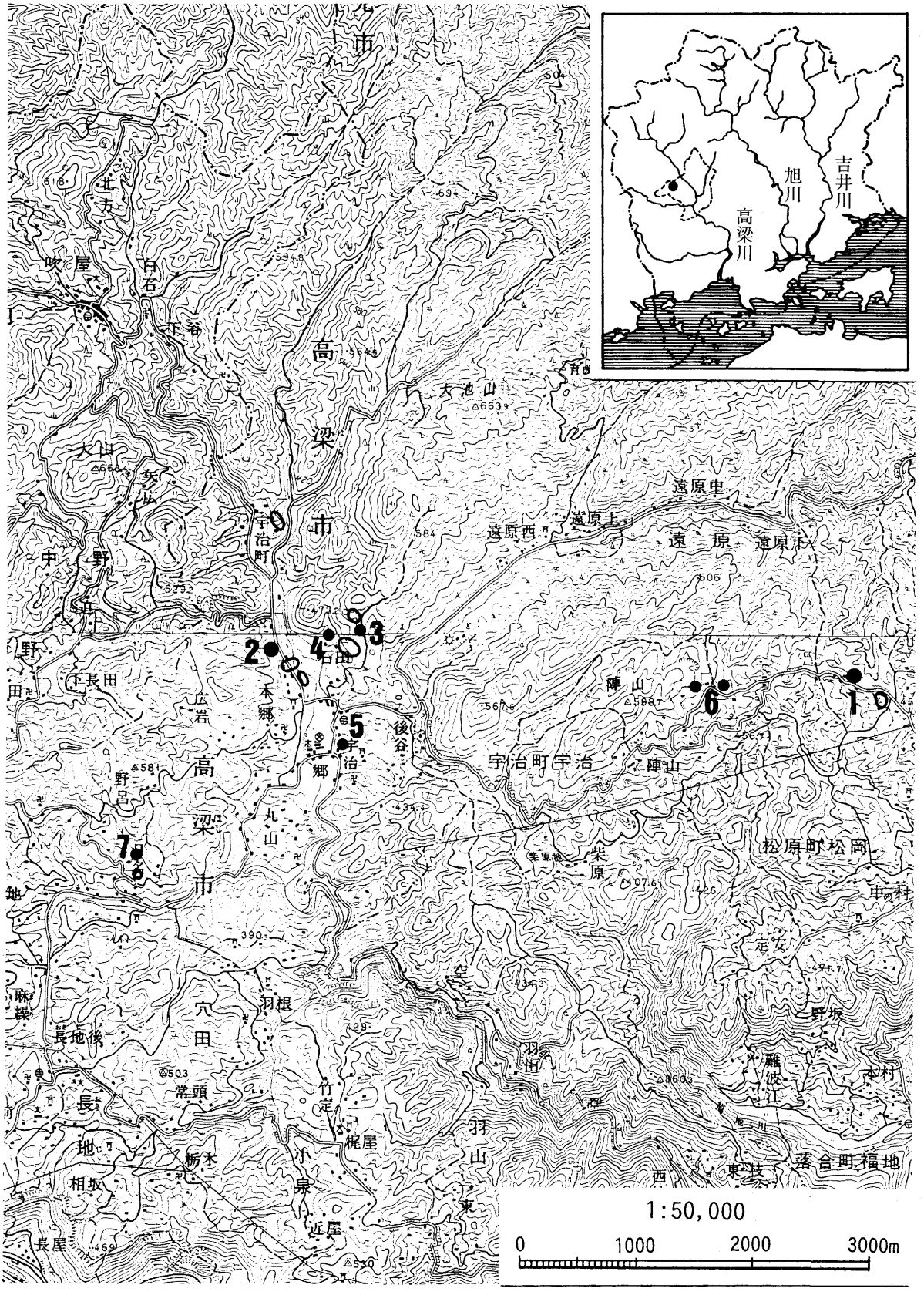
両遺跡が位置する高梁川西岸の吉備高原西端地域での遺跡の存在は、現在までのところあまり知られていない。旧石器・縄文時代では陣山遺跡以外確認されておらず、続く弥生時代も本郷遺跡以外に現在までのところ明らかになっていない。古墳時代になると宇治町石田の石田古墳群や松原町陣山古墳群（横穴石室）などの小規模な古墳が築かれる程度である(3)。このように同地域の現在まで確認されている遺跡を概観すると高梁市でも遺跡が希薄な地域である。しかし、この地域の地理・地形的な立地条件を観察すると、未だ発見されていない遺跡が数多くあることが予想されるし、宇治地区には時期がはっきりしないが、数か所の遺物散布地が確認されている。今後の調査で遺跡の増加が期待される地域でもある。

註

(1)　高梁市総務部企画課「自然環境」『市勢のしおり』高梁市 1998

(2)　平松英志、大塚尚男「高梁地域の地質と地史の概要」『高梁市史』高梁市史編纂委員会 1979

(3)　岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』1978



1．陣山遺跡　　2．本郷遺跡　　3．石田古墳群　　4．石田散布地

5．郷中散布地　　6．陣山古墳群　　7．穴田散布地

第１図　周辺の遺跡分布図(1/50,000)

第2章　調査の経過

1　調査の経過

1973年から岡山県教育委員会による県内市町村の遺跡分布調査が5か年計画で実施され、1974年には高梁市も対象地域として分布調査が行われた。この調査では、高梁市街から北西の高原地帯の松原町陣山採集の石器と宇治町本郷採集の特殊器台破片が注目を集めた。当時、この分布調査に参加していた鎌木義昌は、1966年頃に石井宏一氏が畑の耕作をしたおりに発見されていた陣山遺跡の石器を実見し、旧石器時代の所産である可能性が考えられることを示唆した。そして、本郷遺跡採集の特殊器台は、1974年4月の分布調査の際に採集し新たに発見された遺跡である。

また、1972年からは「高梁市史」の編纂が進められていた。これに伴い高梁市教育委員会は、市史編纂の資料収集のため、陣山遺跡および本郷遺跡のより詳細な遺跡の性格を把握するために学術発掘調査を計画し、瀬戸内考古学研究所（所長：鎌木義昌）に調査を依頼した。

陣山遺跡の調査は1975年7月21日から7月27日の7日間、本郷遺跡は1976年7月16日から7月23日までの8日間それぞれ実施された。

2　調査組織

調査主体　高梁市教育委員会

調査団長、調査担当者　鎌木 義昌（岡山理科大学理学部教授、瀬戸内考古学研究所所長、平成5年死去）

調査参加者

飯田　学、岩田 健嗣、大西 健一、岡　清秀、佐伯　修、柴崎　実、谷山 雅彦、鶴丸 勝文、中島　鎮、長谷川 清美、浜田 小浪、堀川　純（現姓：白石）、望月　裕、山川 沢美（以上岡山理科大学考古学研究会）、三枝 健二（現：広島県立歴史博物館）、順正短期大学考古学研究部

3　謝辞

この調査の実施にあたっては、関係各位からご支援をいただいた。とくに陣山遺跡、本郷遺跡の地権者をはじめ調査団の合宿生活では、地元松原町陣山地区、宇治町本郷地区の方々の温かいご援助を得たことを記して感謝の気持ちを表します。

陣山遺跡発掘調査参加者（1975年７月）

本郷遺跡発掘調査参加者（1976年７月）

第３章　陣山遺跡の調査

１　調査の概要

調査の契機となった石器の採集された牧草地が立地する丘陵は、北西から南東方向に延びている。地形的には、北西から延びた丘陵が徐々に高くなって標高445m付近で最高点となり、そこから南東方向に緩やかに下る地形である。採集地点は、同丘陵の最高点付近で、この地点を中心として調査区をグリッド方式で設定した。グリッドの設定は、同遺跡からの視界が南西および南に開けていることから、丘陵の頂上部から南西緩斜面部に幅４m、長さ20mのトレンチを２列隣接して設定し、北西側のトレンチを第１トレンチ、南東側を第２トレンチとした。そして、このトレンチを北東側から４m間隔で５区画（４×４mグリッド）とし合計10区画設定し、北西端から第１トレンチA、B、C、D、E区、第２トレンチA、B、C、D、E区とした。（第２図）

調査は、表土（第Ⅰ層）を20cmの深さで掘り下げ、平面的に遺物の分布を確認しながら、掘り下げていった。その結果、遺構などは検出されなかったが、遺物が第Ⅰ層、第Ⅱ層から出土した。

２　層序（第３図）

本遺跡では安山岩基盤層の上に５枚の堆積層を確認した。以下、各土層について述べる。

第Ⅰ層　黒褐色土層。３枚に細分される。

第Ⅰａ層　黒褐色土層。

第Ⅰｂ層　黒褐色土層（黒ボク）。Ⅰａ層よりやや黒色である。

第Ⅰｃ層　黒褐色土層～灰黒褐色土層。パサパサして粘性がない。

第Ⅱ層　黄褐色土層。上部はパサパサしているが、下部にいくに従い粘性がありややしまっている。

第Ⅲ層　赤紫色土層。基盤層であるが２枚に細分される。

第Ⅲａ層　赤紫色土層。基盤の安山岩風化礫およびバイ乱土。

第Ⅲｂ層　岩盤。安山岩の基盤層。

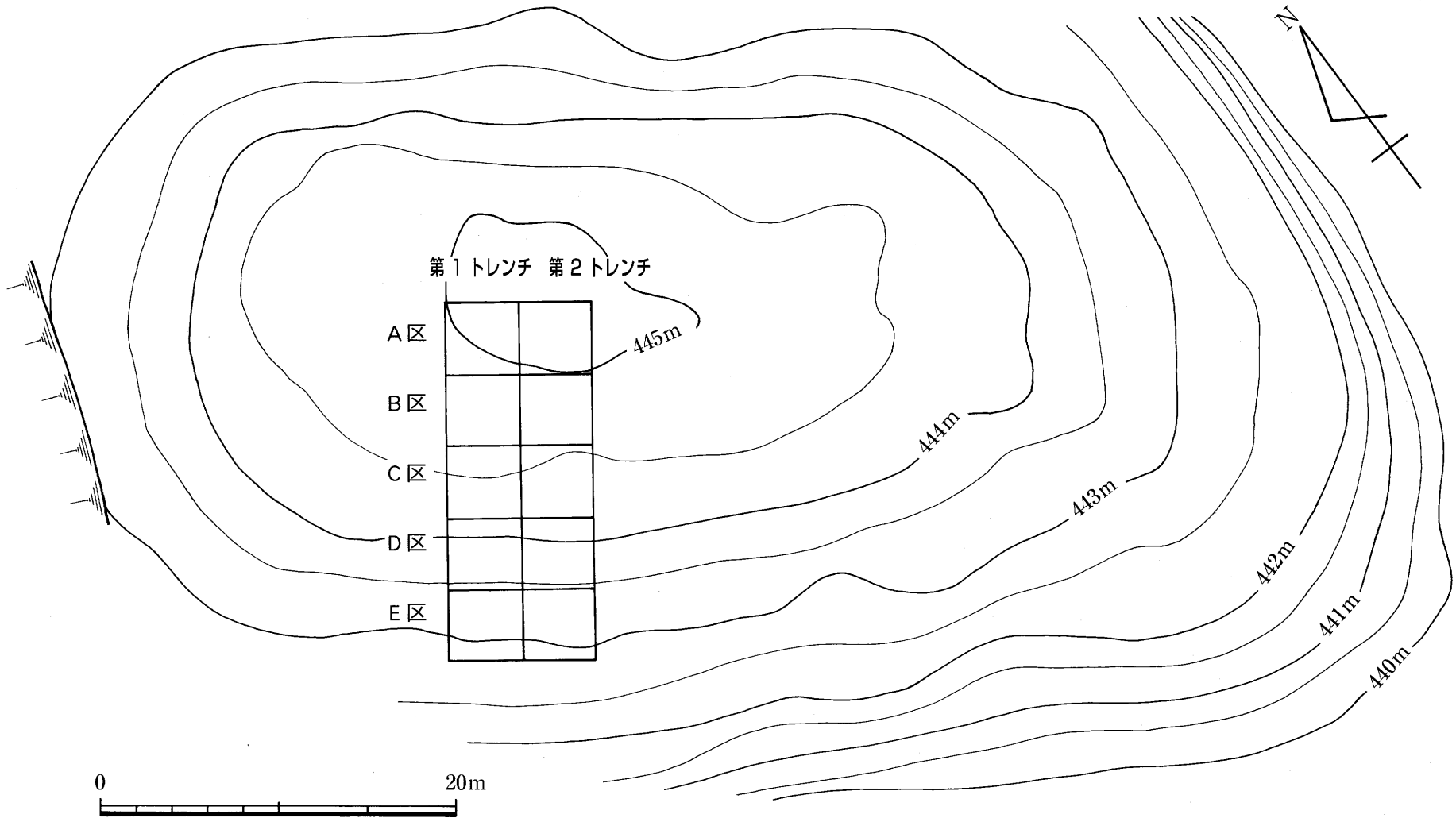
Ⅰａ層の層厚は20～30cmで調査区全面で認められるが、Ⅰｂ層は調査区ではレンズ状に入り層厚は約15cmである。Ⅰｃ層は調査区の標高443mより上でほぼ全面に堆積しているが、それより下では堆積が希薄になる。層厚は10～20cmである。Ⅱ層は調査区全面に認められ、層厚は30～40cmである。

今回の調査では、遺物包含層を２枚確認した。遺物の出土層位は第Ⅰ層および第Ⅱ層で、縄文時代早期から前期の土器と石器である。おもに出土する層位は、Ⅰｃ層およびⅡ層上面である。

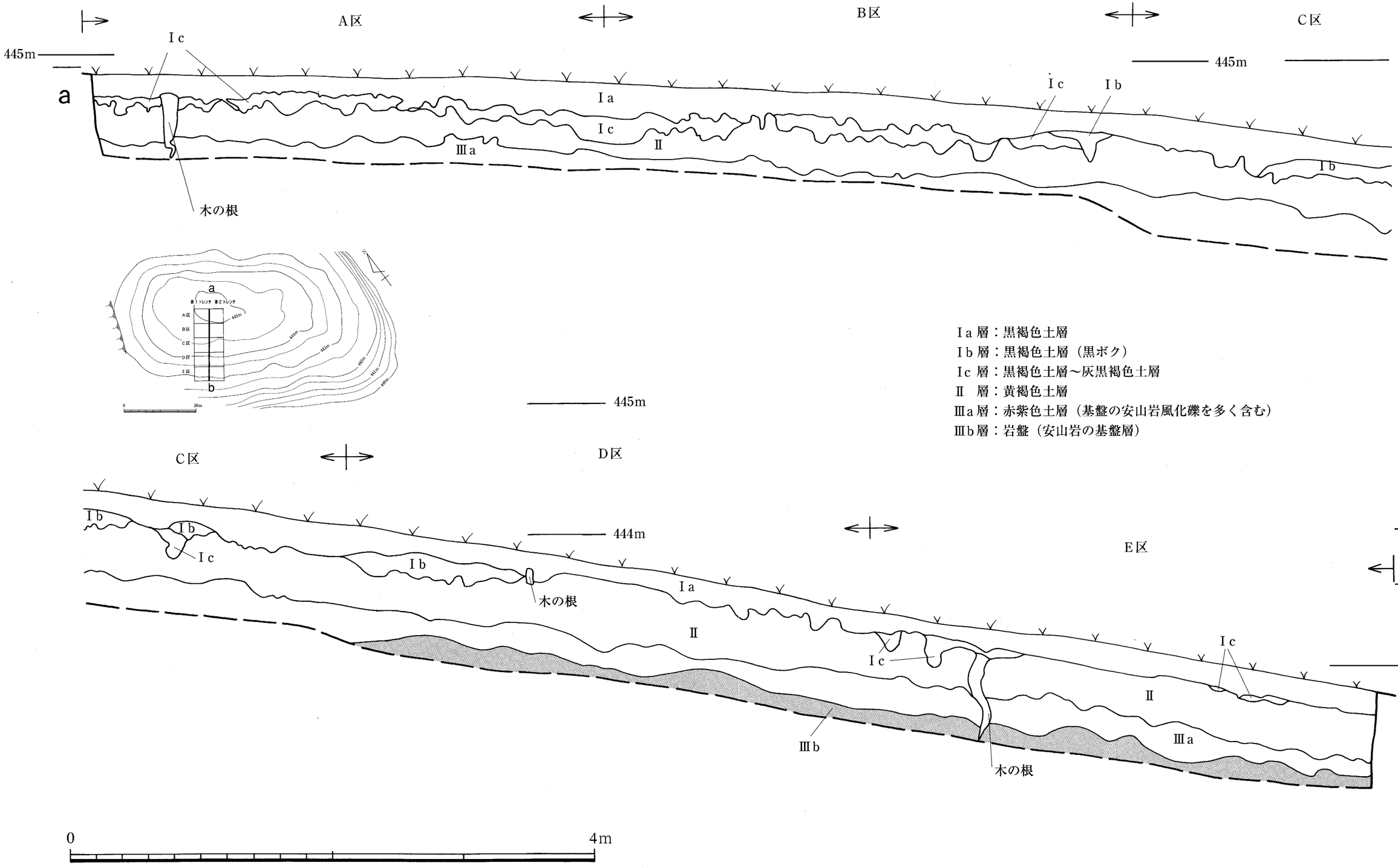
３　出土遺物

この調査では、遺構などは検出されなかった。したがってここでは、遺物のみについて述べる。

縄文土器の出土状況は、第１トレンチA、B、C、D、E区、 第２トレンチA、B、C、D、E区の第Ⅰｃ層、Ⅱ層上面の土層で、各区画からほぼすべて出土している。出土点数も各区画とも１点から数点とほぼ同じで、区画により出土点数の多少の差はみられない。



第２図　陣山遺跡調査区配図（1/400）



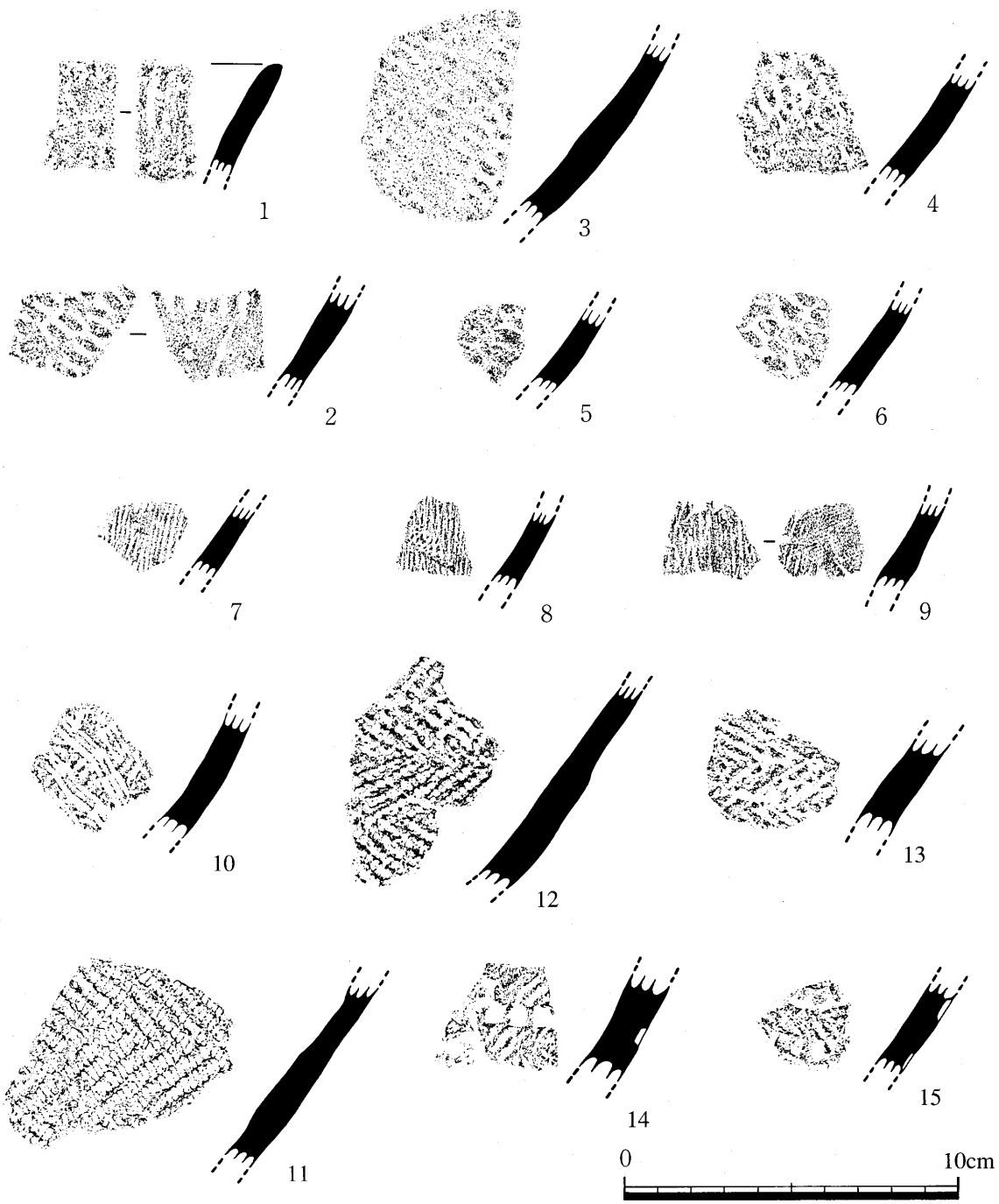
Ⅰa層：黒褐色土層
Ⅰb層：黒褐色土層（黒ボク）
Ⅰc層：黒褐色土層～灰黒褐色土層
Ⅱ　層：黄褐色土層
Ⅲa層：赤紫色土層（基盤の安山岩風化礫を多く含む）
Ⅲb層：岩盤（安山岩の基盤層）

第3図　陣山遺跡土層断面図（1/40）

1）縄文土器（第4図1～15）

縄文土器はいずれも小破片で、早期の回転押型文、前期初頭の羽状縄文などがみられる。

回転押型文土器は、楕円押型文（1～6）のみが出土している。1は口縁部でやや外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面には平行短線が施されている。2も口縁部付近の破片で、外面には長径8㎜、短径4㎜の楕円文を、内面には幅4㎜の平行短線が施されている。3～6は胴部の破片と



第4図　陣山遺跡出土遺物1（1/2）

考えられ、3、4は長径8㎜、短径4㎜のやや細長い楕円文で、5、6は長径約10㎜、短径約7㎜の楕円文が施されている。このように、楕円文にはやや細長い楕円と円形に近い楕円文がみられる。また、いずれも焼成は普通で、胎土中には3㎜以下の石英、長石、雲母などを多く含み、色調は褐色～明褐色を呈している。器壁の厚さはいずれも7～10㎜ほどである。

7～9は、条痕文が施された土器である。7、8は外面にのみ幅1㎜前後の条痕文が観察される。9は内外面に幅約3㎜の条痕が施されている。これら条痕文土器の焼成は良好で、色調は橙色を呈し、胎土中には3㎜以下の石英、長石、雲母を含んでいる。また、9の土器胎土中には、火山ガラスが含まれている。いずれの土器も器壁の厚さは7㎜前後である。

10は3本単位の条痕文状の沈線が施され、沈線の幅は約2㎜ほどである。焼成は普通で、色調は橙色を呈し、胎土中には3㎜以下の石英、長石を多く含んでいる。器壁の厚さは8㎜前後である。

11～15は、表面に羽状縄文、縄文が施された土器である。11～13の土器は、外面に羽状縄文が施され、内面はナデ調整である。焼成は良好で、色調は橙色～暗褐色を呈し、胎土中には3㎜以下の石英、長石、雲母を多く含くみ、植物繊維の混入がみられる。特に、13の土器には多量の植物繊維の混入が観察される。器壁の厚さは、11、12が6～8㎜前後で、13が10㎜前後とやや厚めである。14は外面に縄文を施し、半截竹管による刺突がみられる。また、胎土中には2㎜以下の石英、長石と0.5㎜以下の角閃石、赤色粒が多く含まれ、植物繊維も多量に認められる。色調は暗赤褐色で焼成は良好。器壁の厚さは12㎜とやや厚めである。15も外面に縄文を施し、半截竹管による結節状の刺突が観察される。胎土中には3㎜以下の石英、長石を多く含み、焼成は普通で、色調は暗褐色である。器壁の厚さは6㎜前後である。

2）石器（第5図）

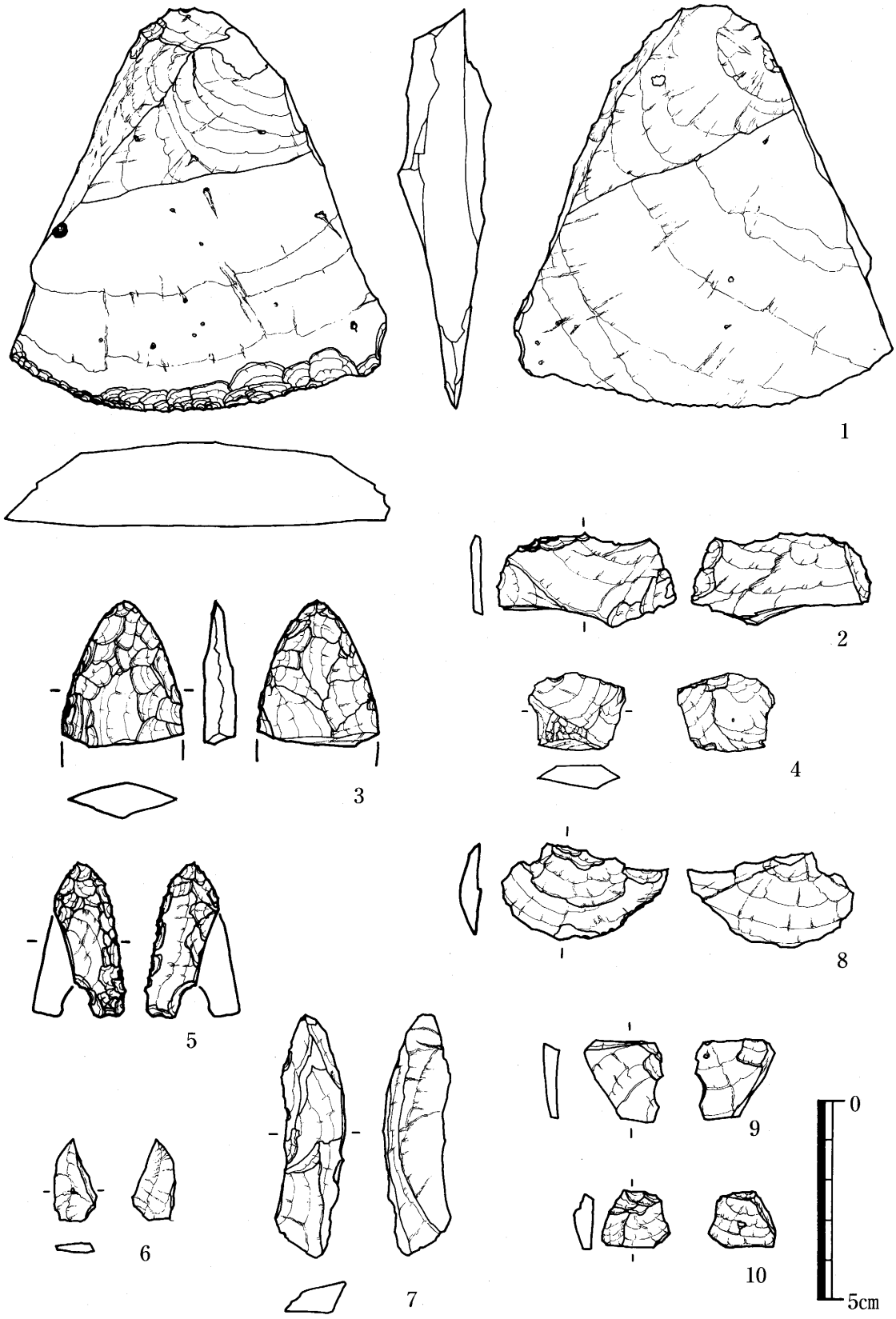
石器も縄文土器と同様に、第Ⅰc層および第Ⅱ層上面から10点出土している。出土地区は、第1トレンチA、Cと第2トレンチA、C、Dの各地区である。また、土器の出土状況と比較すると、石器の場合は、ある程度まとまって出土しているようである。それは、第1、第2トレンチのA区と第1、第2トレンチのC区の2地区に多く分布している。

出土石器は、尖頭器、スクレイパー、石鏃、剥片などが出土している。

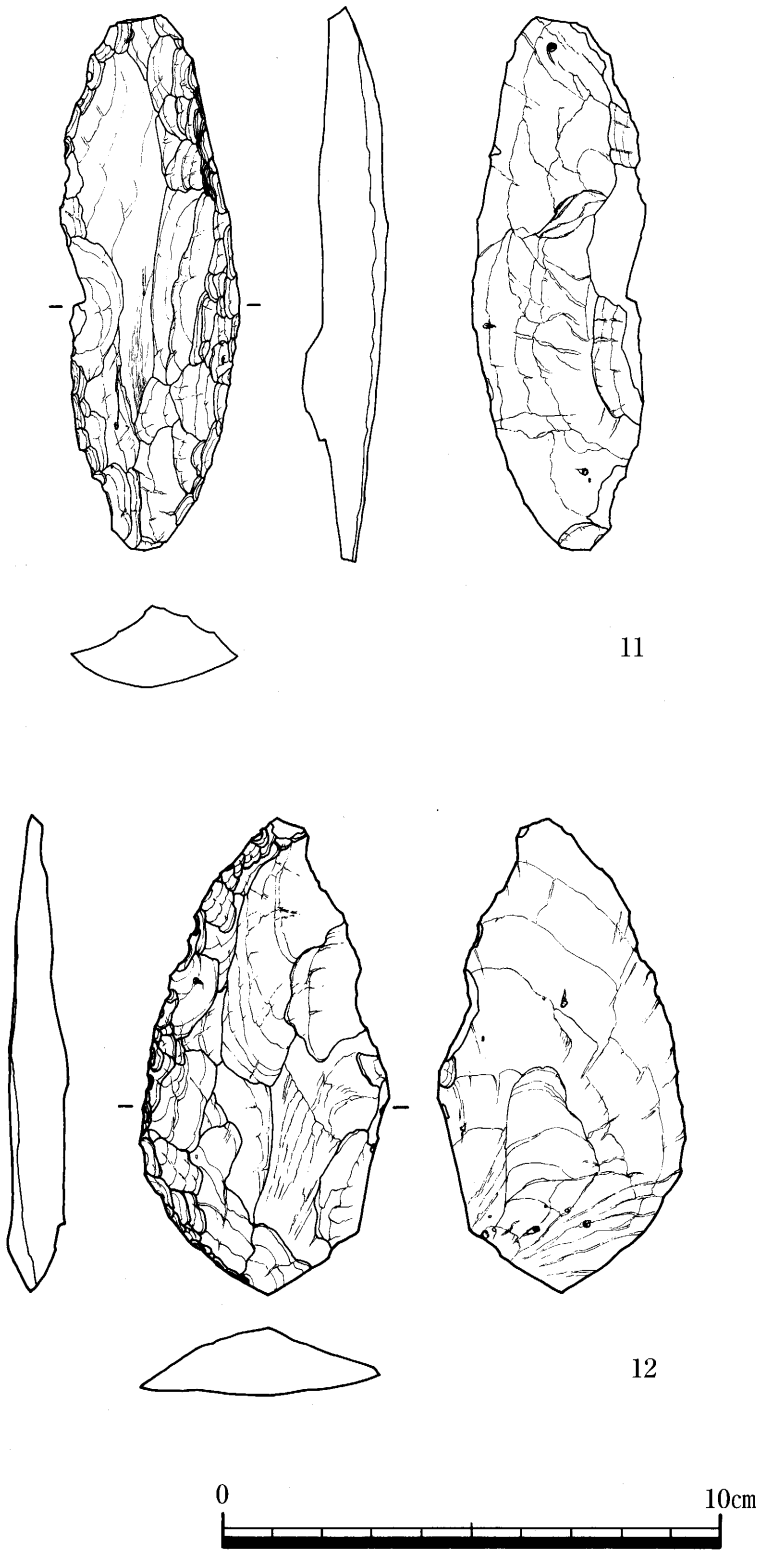
1のスクレイパーは、第1トレンチA区Ⅱ層上面からの出土で、大型縦長状剥片を素材としている。背面には3枚の剥離面が認められ、そのうちの2枚は上方向からの加撃により剥離され、下半分の大きな剥離面は、素材となった剥片のときのものである。そして、この下端部全体に刃部形成のための剥離痕が観察される。腹面には2枚の大きな剥離面がみられ、2枚の剥離面とも上方向からの加撃による調整や使用痕などの微細な剥離痕は認められない。また、両側辺とも上方向からの加撃により剥離されており、基部にあたる上半分を装着あるいは持ちやすいように、幅を減じるために加工したとも考えられる。

3の尖頭器は、第2トレンチA区Ⅱ層上面の出土で、安山岩製の横長剥片を素材としている。下半分を欠損しているが、両面調整の木葉形尖頭器と考えられる。欠損部付近で最大幅となるようで、ほぼ中央部と思われる。調整により横断面形状は凸レンズ状となる。

5の石鏃は、第1トレンチC区Ⅰc層からの出土で安山岩製である。石鏃の形態は凹基式に分類され、基部の抉りが逆U字状に入る。なお、脚部の半分が欠損している。



第５図　陣山遺跡出土遺物２（2/3）



第６図　陣山遺跡表面採集遺物１（2/3）

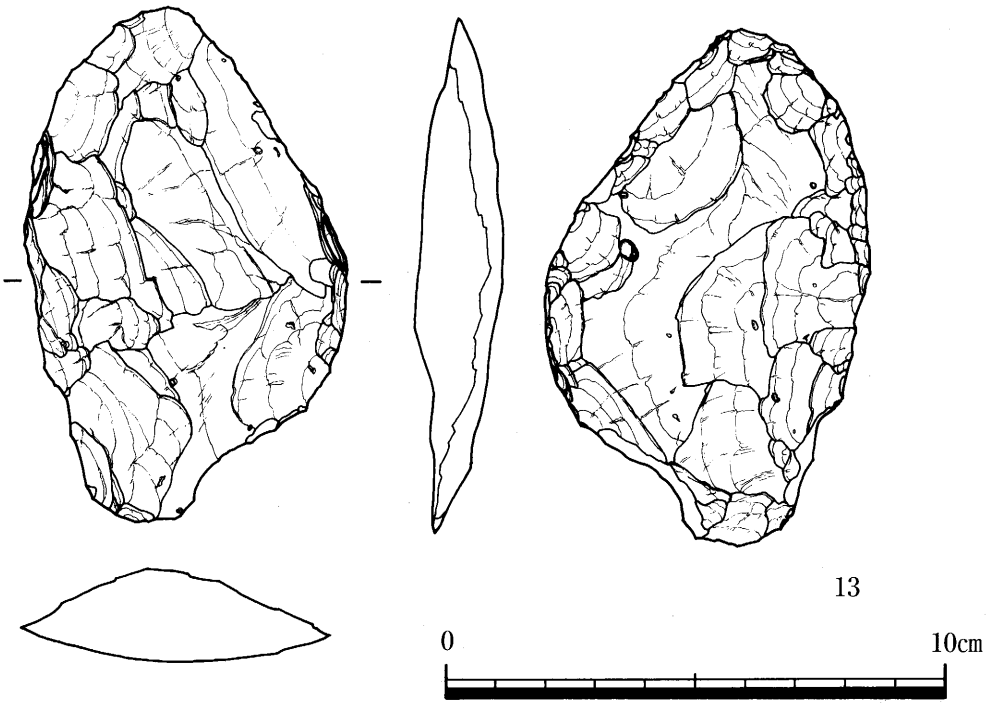
８の使用痕がある剥片は、第２トレンチD区Ⅱ層上面から出土している。安山岩製の横長剥片で、背面下半分に細かな剥離痕が認められる。

２、４、６、７、９、10の剥片は第１、第２トレンチA、C、D区のⅠc層とⅡ層からの出土である。いずれも安山岩製で、剥片の長さ、幅が６cm以下のものである。４、６、９、10のように長幅比１：１程度の剥片と２、７のような横長剥片の二つに大きく分類できる。７の剥片以外はほとんどが薄身の剥片である。また、７の細身の横長剥片は、背面左側縁からの加撃により打面部を剥離している。表面の風化が著しく他のものと比べてやや古い様相を呈している。

３）尖頭器（第６図11、12）、両面加工石器（第７図13）

この３点の石器は、本遺跡の表面採集品で、この発掘調査の発端にもなった石器である。

11、12は槍先形尖頭器で、11は安山岩製の大型の横長剥片を素材とし、背面の周辺全体に調整剥離が施されている片面調整で槍先形に整形されている。先端部を欠損している。12も安産岩製の大型の縦長剥片を素材とし、背面左側縁部から基部にかけて腹面側からの加撃による細かな調整剥離が認められる。右側縁部にも部分的ではあるが大



第7図　陣山遺跡表面採集遺物2（2/3）

きな剥離痕がみられるが、未製品かもしれない。11と同様に片面調整である。13は安山岩製の大型の横長剥片を素材とした両面加工石器である。両面とも周辺全体に大きな剥離痕ではあるが、ていねいな調整加工が認められ、やや歪な楕円形に整形されている。横断面はレンズ状を呈している。

4　小結

以上のように、今回の調査で出土した遺物について述べてきたが、ここでは若干の整理を行い、出土遺物の時期などについて検討してみたい。

まず、明確な遺構は確認されなかったが、出土遺物は縄文土器、石鏃、尖頭器、スクレイパー、剥片などがある。縄文土器は早期の回転押型文土器と早期末から前期初頭にかけての縄文、羽状縄文である。回転押型文土器は楕円押型文で、楕円は長径が6～10㎜のやや大型で、口縁部内面には幅広の平行短線が施されている。また、表面に縄文を施したあと半截竹管などの工具により刺突文を施した土器は、器壁も厚くて胎土中に植物繊維を多量に含む特徴のある土器である。羽状縄文にも少量ではあるが植物繊維が混入している。この縄文に刺突文が施される繊維土器は、広島県帝釈峡遺跡群で出土しているし[1]、繊維が混入している土器は、岡山県北部でやや量的にまとまって出土している[2]。また、この繊維土器は瀬戸内沿岸地域では確認されておらず、中国山地や山陰側での分布が知られており、北陸、東海地域でもその存在が顕著で、現在の出土資料から本遺跡出土の繊維土器も含め、中国山地の繊維土器群を使用した集団は、山陰、北陸、東海地方の文化との関連で、この地域に影響したと考えられるようである[3]。

石器では、石鏃、スクレイパー、尖頭器が各１点ずつ出土したが、石鏃、スクレイパーなどは前述した縄文時代早期の土器などに伴うと考えられるが、尖頭器に関してはこれら土器よりはやや古い様相を呈しており、前段階の草創期に属することも十分に考えられるが、出土点数がわずか１点で、あまりにも少なく明確な時期を決めがたい。また、表面採集品である尖頭器、両面加工石器は調査で出土した早期の石器類とは剥離技術などの石器製作技術が異なっており、時期差があると考えられ、やや古い様相を呈している。しかしながら、これら石器類に関しても明確な時期はわからない。

以上、出土土器、石器の所属時期について述べてきたが、遺物の出土状況から少し気になったことにつて述べる。まず、土器の出土状況は、調査区内でまとまって出土するような傾向はみられず、散漫な分布での出土であった。しかし、石器類に関しては、大きく二つの出土地区に分かれる傾向にある。それはA区とC区で、二つの石器集中区があった可能性が考えられる(4)。

註

(1)　潮見　浩「帝釈峡遺跡群の繊維土器」『論集 日本原史』論集日本原史刊行会編　吉川弘文館 1985

(2)　河瀬正利「中国山地の縄文文化　－帝釈峡遺跡群を中心として－」『松江考古』第３号　松江考古学談話会 1980

(3)　註２

(4)　土器15点、石器10点と出土点数が非常に少なく、個々の遺物の出土地点も正確に記録していないため、出土地区のみからの推測であることを断っておく。

第１表　陣山遺跡出土石器観察表

遺物番号	器　種	出土地区	大きさ(長さ、幅、厚さcm)	重さ(g)	石材
1	スクレイパー	第１トレンチA区Ⅱ層	10.14×9.42×2.28	187.9	安山岩
2	剥片	第１トレンチA区Ⅰ層	4.41×2.35×0.48	4.6	安山岩
3	尖頭器	第２トレンチA区Ⅱ層	3.78×2.95×0.84	8.6	安山岩
4	剥片	第２トレンチA区Ⅱ層	1.96×2.39×0.82	3.0	安山岩
5	石鏃	第１トレンチA区Ⅰ層	3.85×1.77×0.36	2.1	安山岩
6	剥片	第１トレンチA区Ⅰ層	2.08×1.10×0.21	0.5	安山岩
7	剥片	第２トレンチA区Ⅰ層	6.10×1.70×0.97	8.7	安山岩
8	使用痕ある石器	第２トレンチA区Ⅱ層	4.23×2.40×0.43	3.8	安山岩
9	剥片	第２トレンチA区Ⅱ層	1.41×1.70×0.48	1.6	安山岩
10	剥片	第２トレンチA区Ⅱ層	2.00×1.84×0.42	1.0	安山岩
11	尖頭器	表面採集	10.81×2.36×1.65	55.0	安山岩
12	尖頭器	表面採集	9.47×4.96×1.24	50.5	安山岩
13	両面加工石器	表面採集	10.41×6.25×1.82	116.2	安山岩

第４章　本郷遺跡の調査

１　調査の概要

1974年４月の分布調査で採集された特殊器台、高坏（第20図）は県道宇治－坂本線の拡幅工事で削られた道路の断面より出土したものである。出土した３点の特殊器台の破片は、胴部破片で表面にはいずれも赤色顔料が塗られ、円形ないしは巴形の透かし孔が施され、沈線の文様構成からS字状の連続文が考えられる。胎土にはすべて角閃石、黒雲母を多量に含み、色調は暗褐色を呈している。このように、採集された土器は吉備地域の弥生時代後期後半の墳墓遺跡から出土する遺物で、本遺跡も墳墓に関係した遺跡と想定し、調査に入った。

遺跡が位置する宇治地区は、標高約340mの高原状地形を呈した平坦面が形成されている。この平坦部中央を島木川が南北に流れ、この島木川の西側には西から東に緩やかに延びる尾根がいくつかある。本遺跡はこの東方向に緩やかに下る尾根の一つに立地している。同尾根の東側の谷部を島木川が南流し、この谷部を通り北方向に抜けると銅およびベンガラの産地で有名な成羽町吹屋地区に至る。

調査地区は西から緩やかに下ってきた尾根が、標高約344m付近で県道宇治－坂本線により南北に寸断されており、先にも述べた特殊器台は、この道路拡張工事で削られた西側断面からの採集品である。発掘調査区の選定では、尾根の残存および遺物の散布状況から、県道のすぐ西隣の丘陵を調査することとした。そして調査区の設定は県道に平行して幅４m、長さ16mのトレンチを設定し、16mのトレンチを、４mごとに区切り、南から１区、２区、３区、４区とした（第８図）。

調査は、４区画とも第Ⅰ層黒褐色粘質土（耕作土）を全面除去し、第Ⅱ層茶褐色粘質土の上面で平面的に遺構の検出を行った。しかし、明確な遺構は確認されなかったものの、土器の集中か所が認められた。第Ⅱ層は、赤色の風化礫が多く含まれている層で、５～10cmの大きさの小礫である。また20cm以上の礫も少し含まれている。遺物はこの層からの出土が主体である。第Ⅲ層褐色粘質土は、Ⅱ層に比べ礫は少ない。

２ 遺構（第９図）

石列と土器の集中区が検出された。

石列は３区から４区にかけての東壁際近くでトレンチに平行して、つまり南北方向に一列の石列を検出した。並んでいる石の大きさは20～30cmほどで、東側にやや傾くように立てられているようで、調査区外の東側にあたる県道で削られた部分を意識して並べられた石列であることが、この状況から推測される。

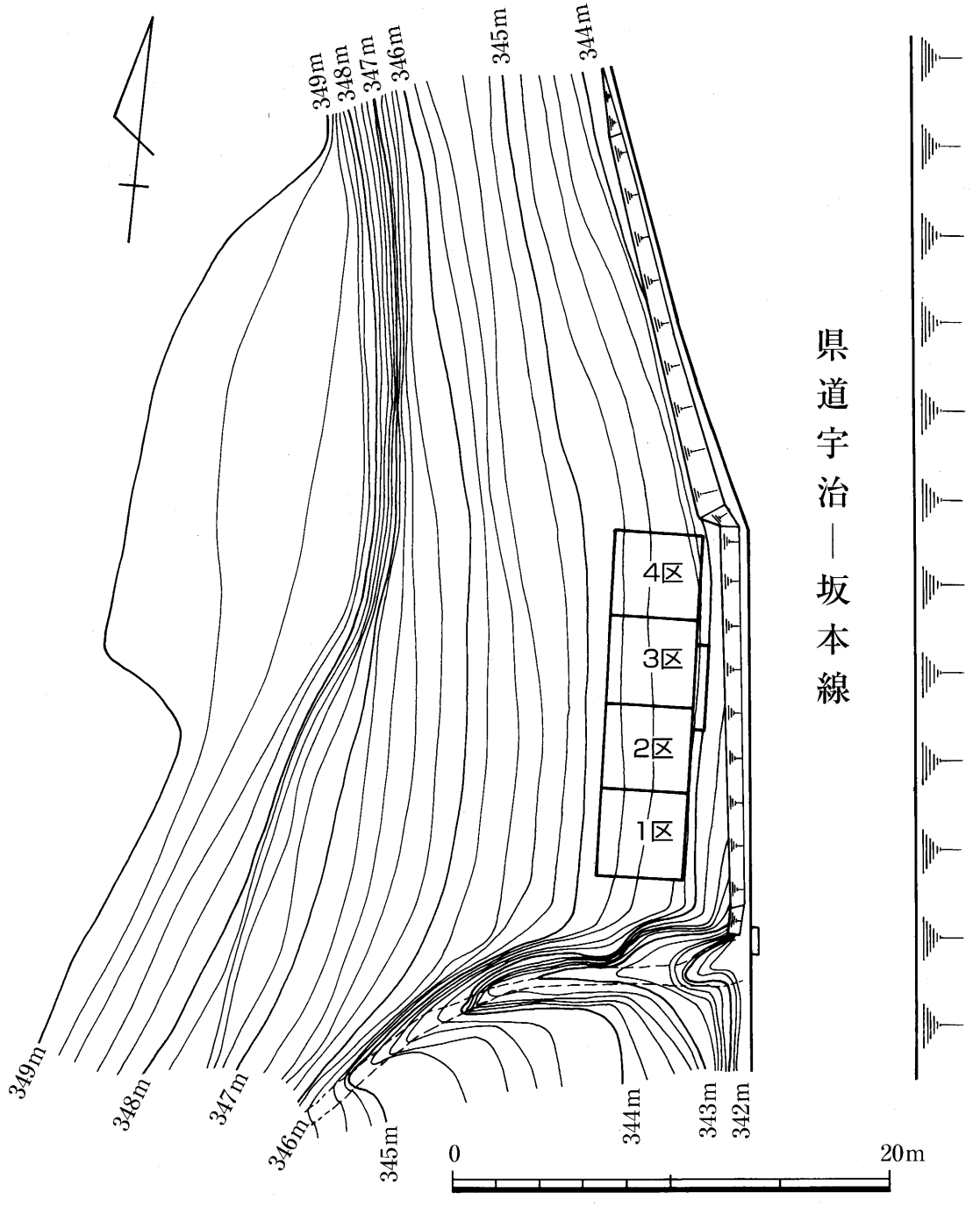
土器集中区は４か所認められた。第９図の平面図のように検出した地区は３区が中心で、第Ⅱ層の中～下部の面での検出である。

土器群１は３区の中央部で検出され、特殊器台、特殊壺の破片が出土している。

土器群２は２区と３区の間で東端の壁際で検出された。壺、甕、高坏、台付壺などが出土している。

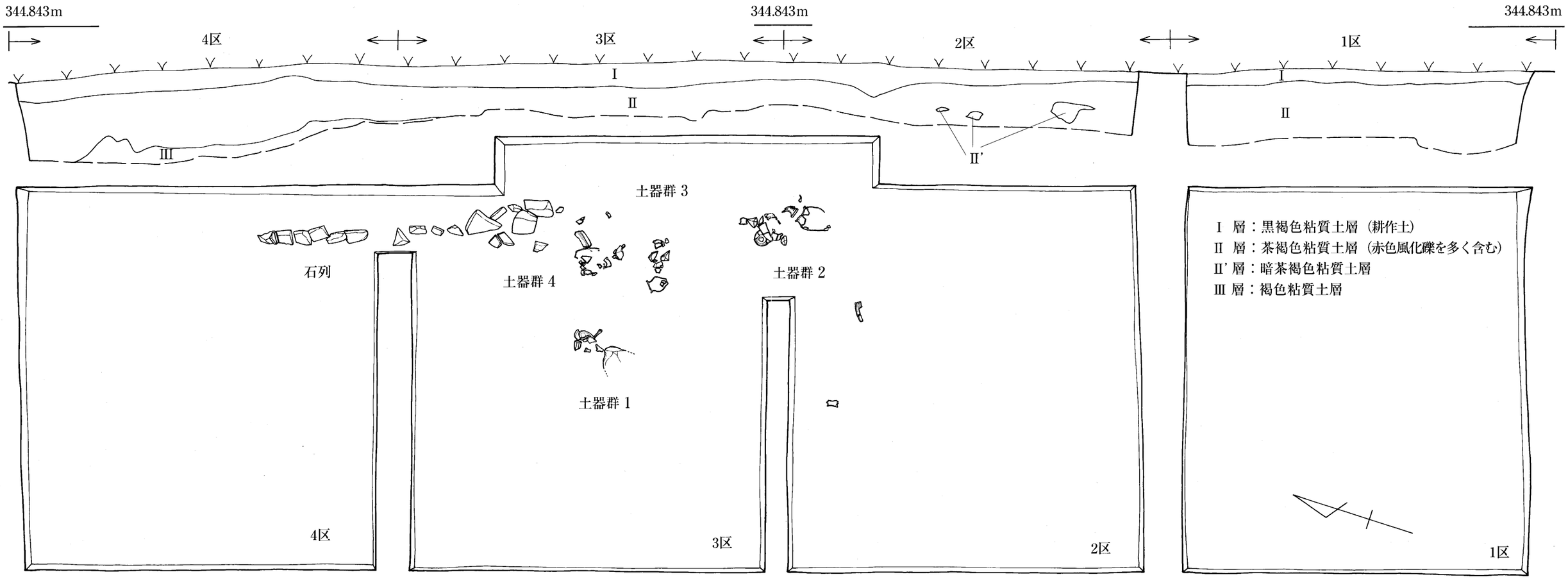
土器群３は土器群１から約１m東に離れたところで、壺、甕、高坏、特殊器台、特殊壺などの破片が出土している。

土器群４は土器群３の北隣で石列の南端に位置し、土器は石列の上および石列に貼り付いて壺、甕などの破片が出土している。



第８図　本郷遺跡調査区配置図（1/300）

東壁土層断面図



第 9 図　本郷遺跡検出遺構配置図 (1/40)

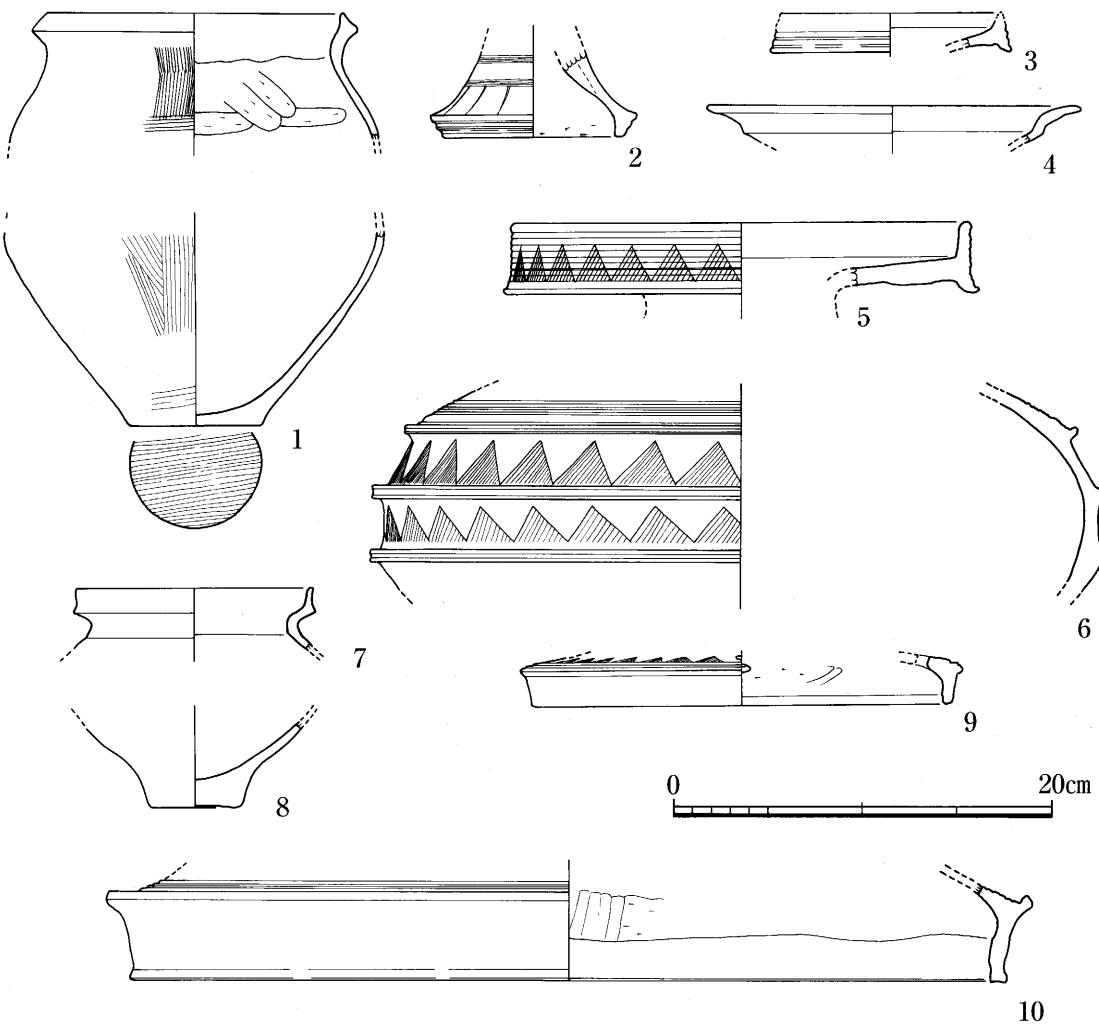
3　出土遺物

1）1区、2区第Ⅰ層・第Ⅱ層出土土器（第10図）

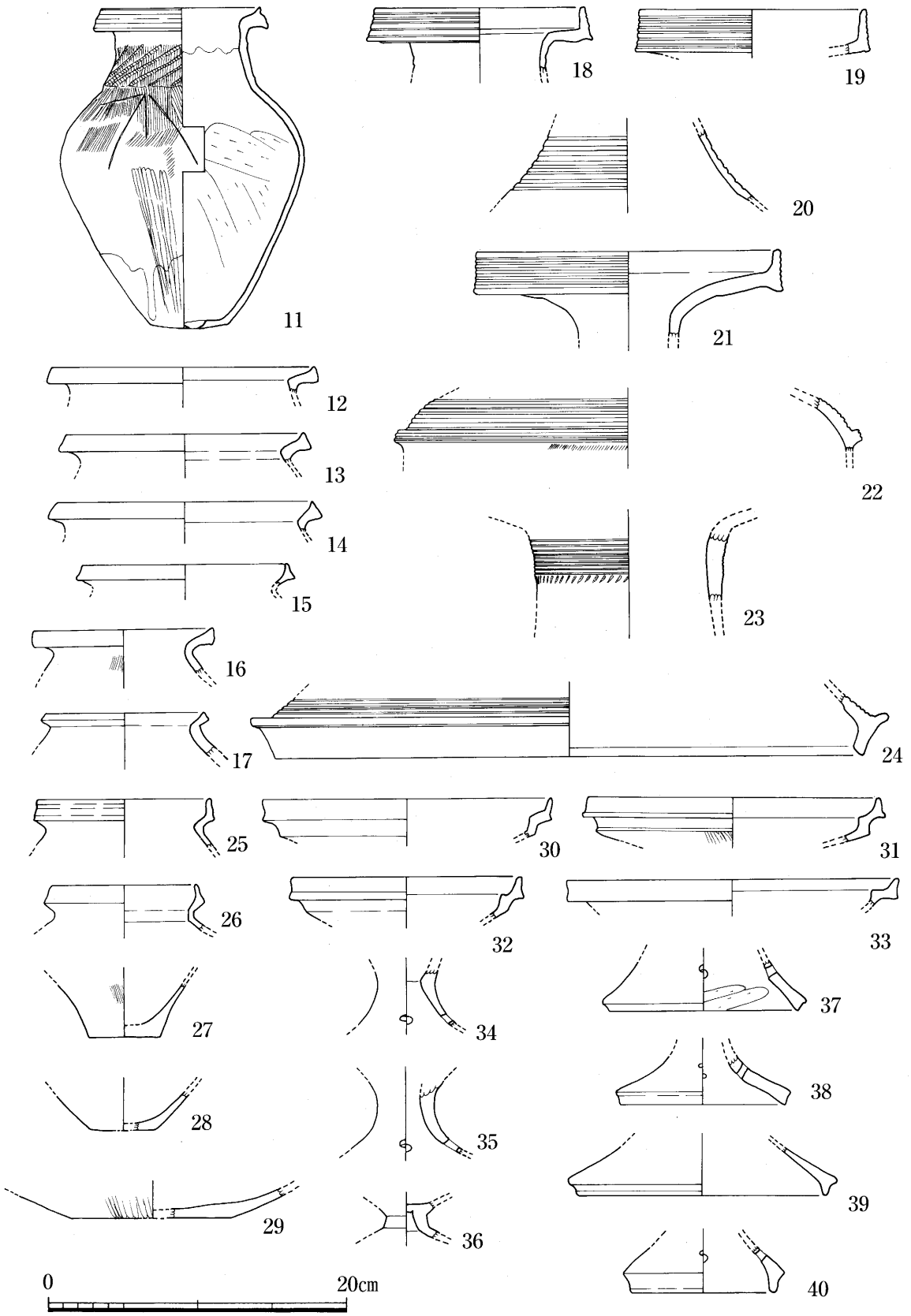
1、2は2区の第Ⅱ層出土の土器である。1は甕の口縁端部で上方に拡張され丸くおさまり、底部は安定した平底で、外面および底部外面にはハケメ、内面はヘラケズリが施されている。底部も含めた外面全体には、赤色顔料が塗られている。2は高坏の脚部で、縦方向に1本単位の沈線が描かれている。胎土には多量の黒雲母、角閃石、石英を含み、色調は褐色を呈している。

3、4は1区の第Ⅱ層からの出土である。3は壺の口縁部で頸部から強く外反し、端部は上下に拡張している。端面には数状の沈線が横方向に施されている。4は高坏の口縁部で、坏部より稜をもち強く外反し、口縁端部は丸くおさまっている。この2点とも表面に赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色を呈している。

5、7、9、10は2区の第Ⅱ層出土の土器である。5は特殊壺の口縁部と思われ、口縁帯にはヘラ描きの平行沈線を施した後、鋸歯文が施されている。7は甕の口縁部破片で複合口縁をもち、口縁部下端



第10図　本郷遺跡1区、2区第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（1/4）



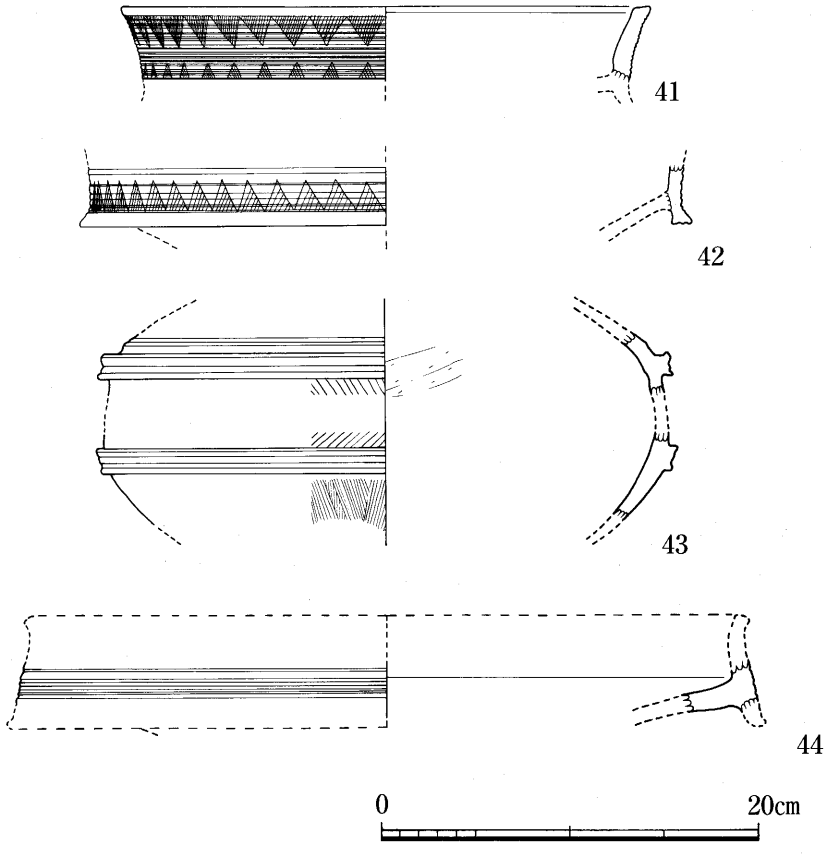
第11図　本郷遺跡３区 第Ⅱ層出土遺物（1/4）

には角をもつ。ヨコナデ調整。５、７とも胎土には多量の黒雲母、角閃石を含み、色調は明褐色から褐色である。９は小型器台の脚部と考えられ、２本の沈線の上方に鋸歯文が施され、透かし円孔を配している。10は特殊器台の脚部で裾部外面には沈線がめぐり、裾部と脚部の間にはしっかりした方形の突帯がつく。内面は縦や横方向のヘラケズリが施されてる。5、7、9、10の土器にはいずれも表面に赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色から暗褐色を呈している。

6、8は２区の第Ⅰ層出土で、6は特殊壺の胴部の破片で３条の突帯がめぐり、肩部の突帯は細くて断面が丸く、この突帯の上側には平行沈線がめぐる。下の２条の突帯は断面が方形で、突帯の間には２段の幅広の鋸歯文が施されている。外面には赤色顔料が塗られ、胎土には多量の黒雲母、角閃石、石英を含み、色調は褐色を呈している。８は壺の底部で、しっかりした平底をもち、胴部にかけて球形を呈するように広がっている。胎土に石英、長石を多く含み、黒雲母が少し認められる。

２）３区第Ⅱ層出土土器（第11図）

11は完形の壺で、口径10.7cm、底径5.1cm、器高21.6cmを計る。口縁部は頸部から屈曲し、端部は上下に拡張している。端面は沈線の上面にヨコナデが施され、頸部から肩部にかけては縦および斜め方向のハケメが認められる。胴部から底部にかけては、ヘラミガキが施されている。肩部には、ヘラ描きによる１点から放射状に描かれた文様がある（図版13－11）。内面はヘラケズリ。外面の底部以外と内面口縁部には赤色顔料が塗られ、顔料が垂れた痕跡がみられる。底部には焼成後の穿孔が認められる。



第12図　本郷遺跡土器群１出土遺物（1/4）

12～17は甕の口縁部で、胴部から強く外反した口縁が端部で上下に拡張し、断面が三角形を呈している。

18～23は壷、特殊壷の破片である。18は壷の口縁部で、端面には沈線がめぐっている。20は壷の肩部の破片と考えられ、沈線が施されている。19、21は器台の口縁部と考えられ、端面に沈線がめぐる。22は特殊壷の胴部上半部で、方形突帯の上側に平行沈線、下側に斜線を施している。23は器台の筒部でヘラ描きの平行沈線を施し、その下には列点文がめぐっている。24はやや内傾する特殊器台の脚部で、裾部に平行沈線を施している。

25、26の甕は、口縁端部が上方に立ち上がる。

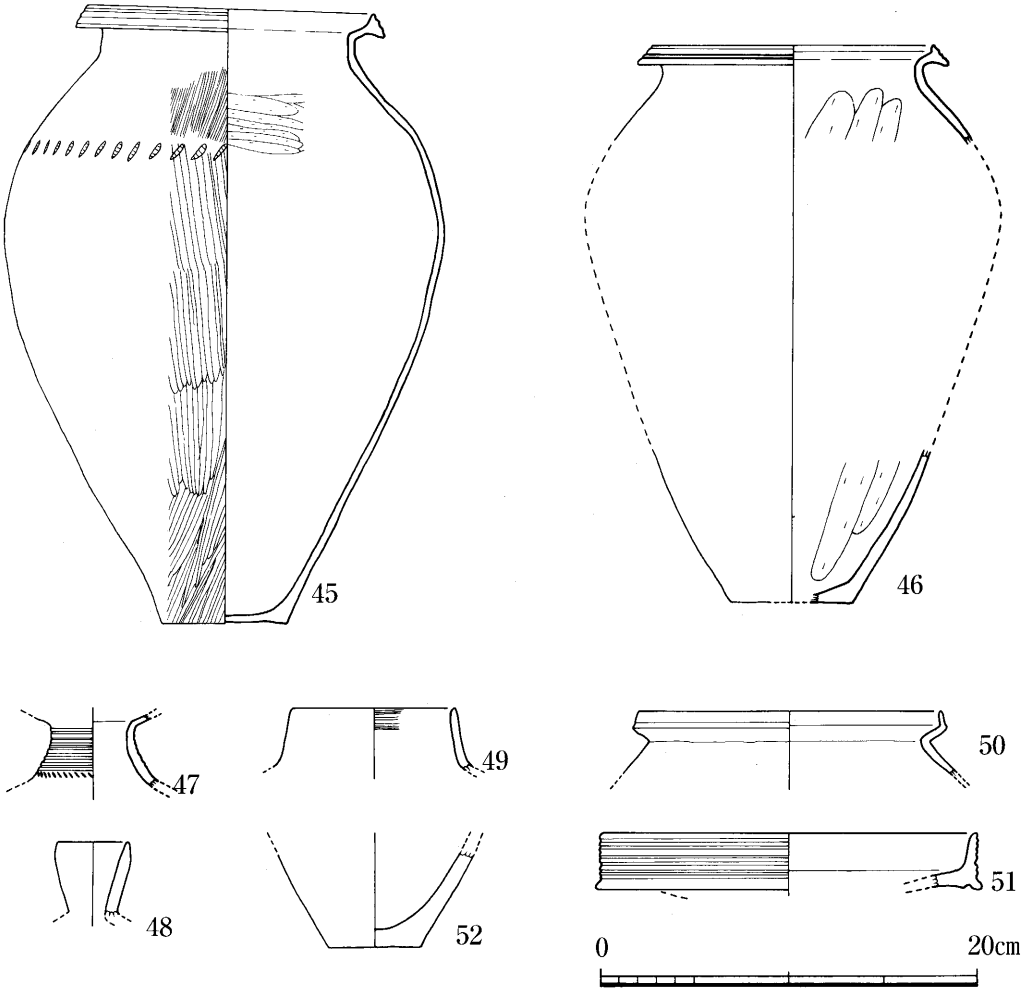
27～29の底部は、いずれもしっかりした平底である。29は特殊壷の底部かもしれない。

30～40は高坏の坏部と脚部の破片で、坏部は口縁が段をもって屈曲し、脚部は一段の透かし円孔を配し、脚端部は肥厚して断面が三角形を呈している。なお、36の脚部は、短脚化が進んでいる。

15、17の甕以外、いずれの土器の表面にも赤色顔料が塗られ、胎土には、黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色から暗褐色を呈している。

3）　土器群１（第12図）

41～43は特殊壷の破片と考えられる。41、42は口縁部で、口縁帯にヘラ描きの平行沈線の上面に鋸



第13図　本郷遺跡土器群２出土遺物①（1/4）

歯文が施されている。43は胴部で方形の2条の突帯がつき、2条の突帯の間には斜線が施されている。

44は器台の口縁部と考えられ、口縁帯には沈線が施されている。

いずれの土器にも表面に赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多く含み、色調は明褐色を呈している。

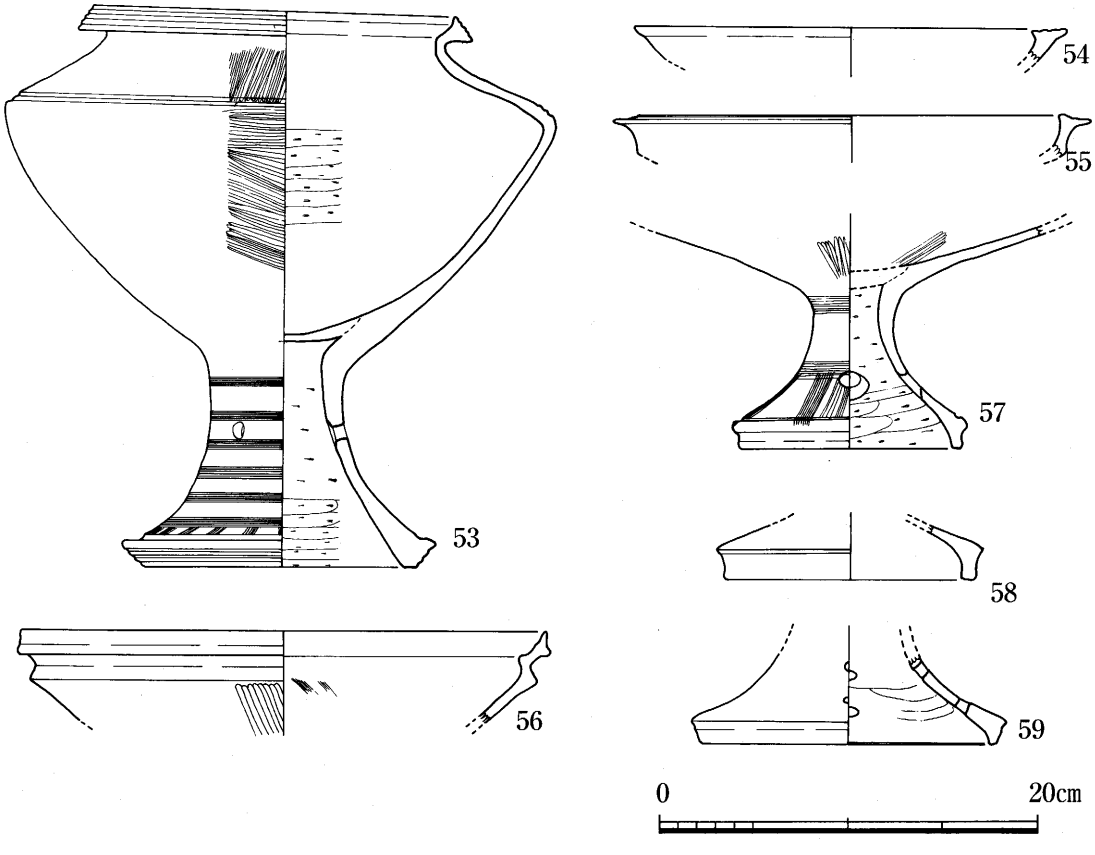
4）土器群2（第13、14図）

45～52は壺、甕、器台の完形品および破片である。

45は壺の完形品で、口径15.3cm、底径6.7cm、器高32.6cmを測る。胴部中央よりやや上に最大径をもち、23.4cmである。口縁部は「く」字状に外反し、端部は上下に強く拡張している。端面には平行沈線が施されている。肩部には刺突による列点文がめぐり、これより上側はハケメが存在し、下側はヘラミガキが施されている。内面は横方法のヘラケズリである。46も壺の破片で、「く」字状に外反する口縁部をもち、端部を上下に拡張し、沈線を施している。底部は平底で、内面に縦方向のヘラケズリ痕がみられる。47は小型壷の頸部から胴部にかけての破片である。頸部には数条の平行沈線がめぐり、肩部に列点文がめぐる。48は小型の直口壺の口縁部と思われ、端部はやや尖り気味に丸くおわる。

49は直口壺あるいはこれに脚部がつく土器の口縁部と考えられ、やや内傾気味に立ち上がっている。

50は甕の口縁部で「く」字状に外反し、端部はやや内傾しながら上方に延びる。51は小型器台の口縁部と考えられ、端部外面にはヘラ描きの平行沈線が施されている。52は器壁がやや厚めの平底底部



第14図　本郷遺跡土器群2出土遺物②（1/4）

で、内外面ともナデ調整である。

53は台付壺の完形品で、口径19.2cm、脚部径14.7cm、器高29.5cm、胴部最大径29.3cmである。やや扁平な算盤玉状の胴部で胴部上方に最大径をもち、口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は上下に拡張する。外面端部には平行沈線が施され、胴部上半は縦方向のヘラミガキ、下半分は横あるいは斜めのヘラミガキが施されている。胴部と脚部の接合は円盤充填法で、端部は肥厚して断面三角形である。脚部外面には櫛描沈線文が施され、一段の透かし円孔を施している。内面はヘラミケズリである。

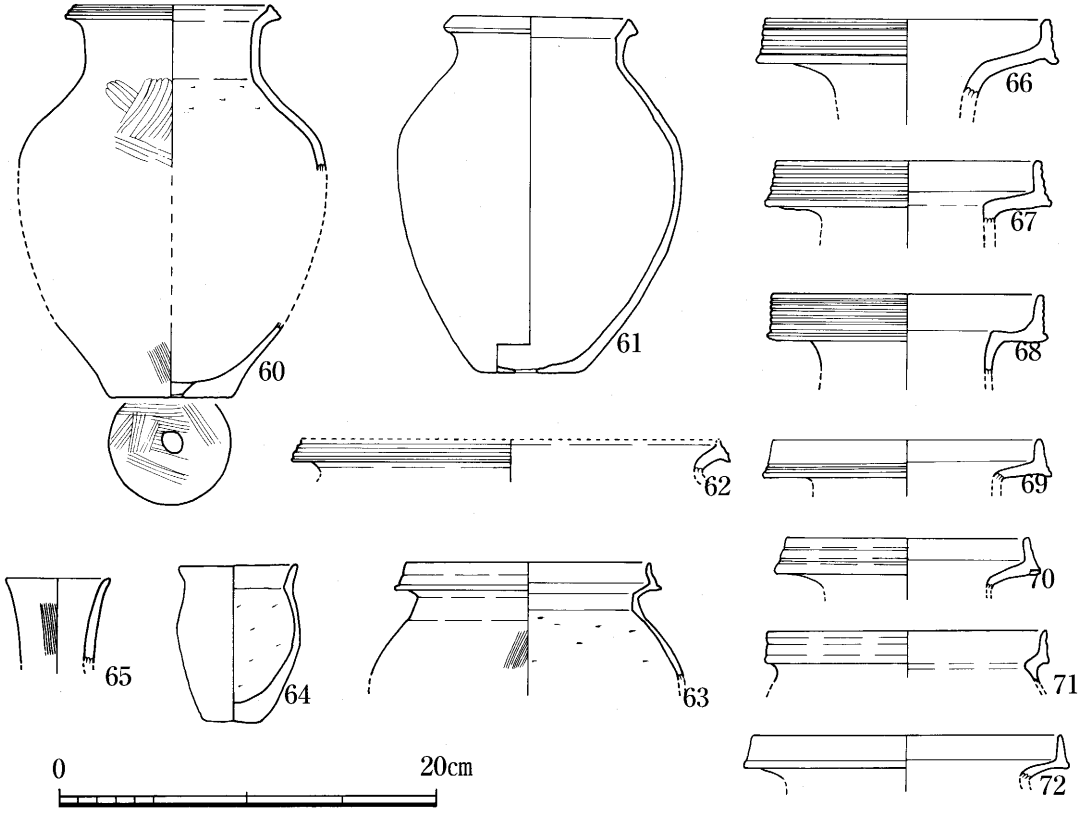
54～59は高坏の坏部と脚部の破片である。54、55、56は坏部で、54、55は口縁端部に平坦面をつくり、浅い凹線文が施されている。56は口縁部が段をもって屈曲し、外面坏部には縦方向のヘラミガキが施されている。57は坏部下半部から脚部にかけての破片で、坏部の内外面ともヘラミガキを行い、脚部外面には櫛描沈線、内面はヘラケズリが施されている。坏部と脚部の接合は円盤充填法による。

58、59は脚部で、58は端部が下方向に延び、59は断面が三角形状で二段の透かし円孔が施されている。

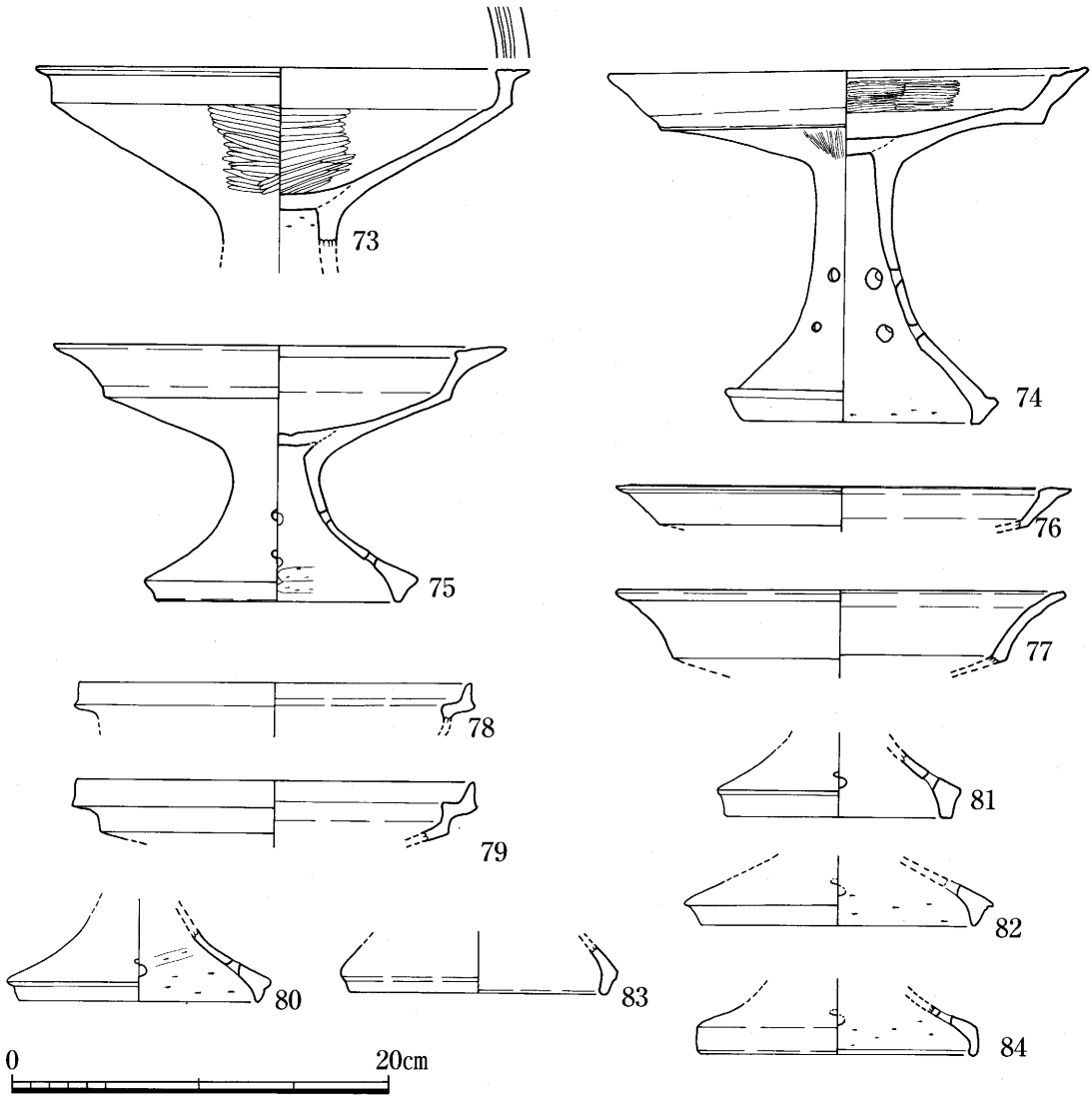
45、47、48、49、50、51、53、54、56、57、58、59の外面には赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は明褐色～褐色を呈している。46、52、55は胎土に石英、長石を多く含んでいる。

5）土器群3（第15、16、17、18図）

60～72は壺の破片で、60は口縁部が外反し、端部は上下に拡張している。底部はしっかりした平底で、中央に径1.5cmの焼成後穿孔が認められる。外面は縦および斜め方向のヘラミガキ、底部外面はハケメ



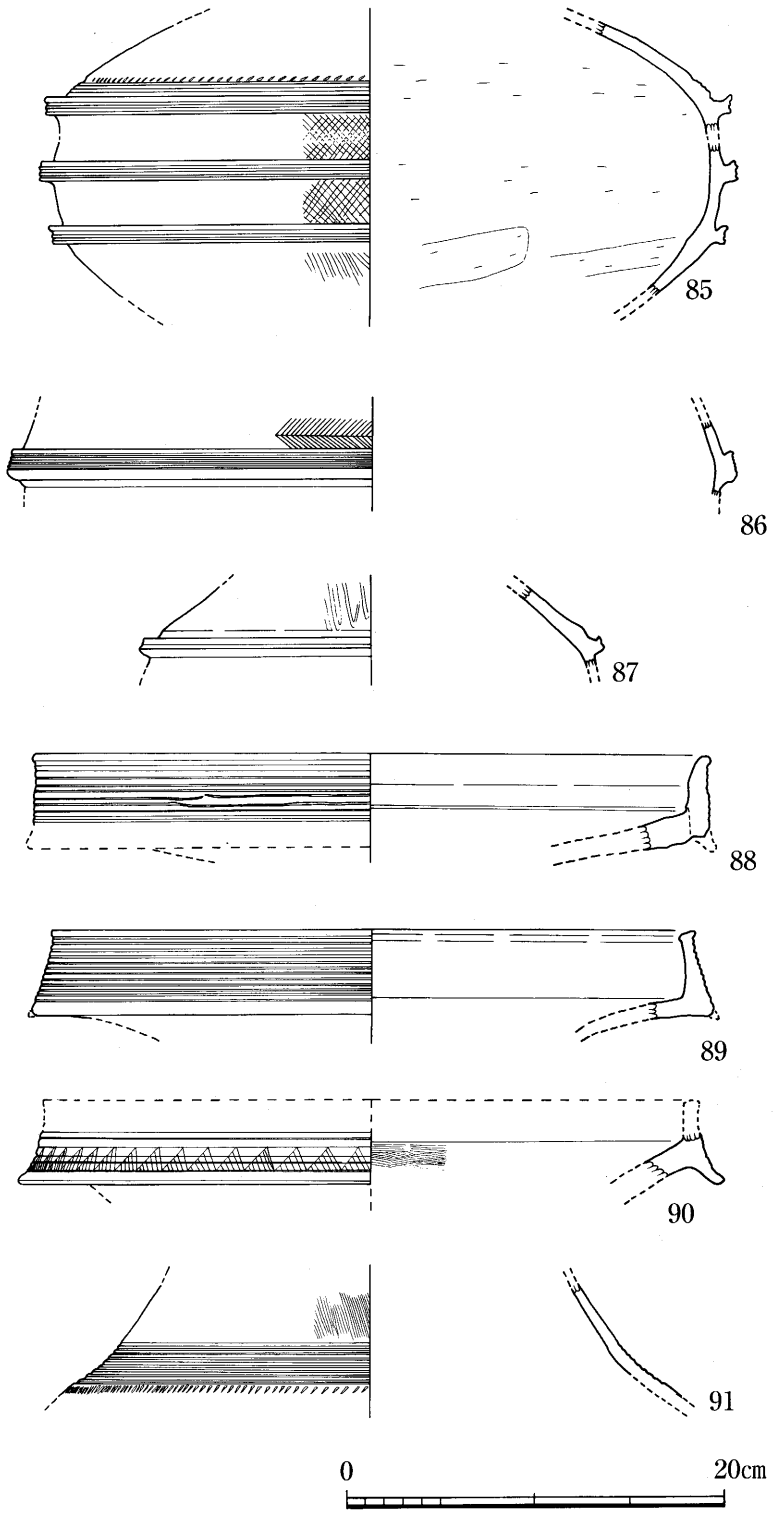
第15図　本郷遺跡土器群3 出土遺物①（1/4）



第16図　本郷遺跡土器群３出土遺物②（1/4）

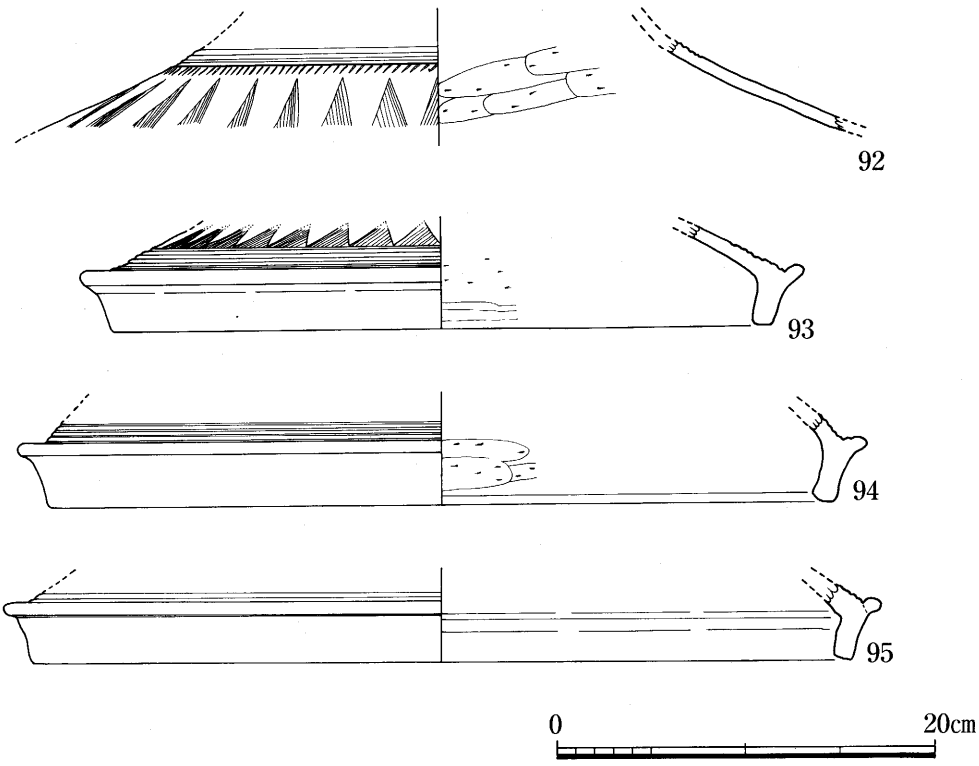
調整で、内面にはヘラケズリが施されている。61も60と同様に口縁部が外反し、端部が上下に拡張している。底部にも径1.3cmの焼成後穿孔が施されているが、器壁の剥落が著しく、調整などははっきりしない。62は「く」字状に開く口縁部で、端面には沈線がめぐる。63は「く」字状に開き、やや内傾気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさまる。外面は縦ハケが存在し、内面はヘラケズリ。64は直口壷の口縁部で、端部に近くなるにしたがってやや外に開き気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。65は完形の小型壺で、底部からあまり胴部が張らずに上方に延び、口縁部が緩く「く」字状に開き、端部がまるくおさまる。底部はしっかりした平底である。内面はヘラケズリ。器高8.3cm、口径6.3cm、底径4cm、底部の器壁厚さ１cmを測る。66～70は壺あるいは小型器台の口縁部と考えられる。頸部からほぼ直角に屈曲し、直立する口縁帯外面には数条の沈線文がめぐっている。71、72は壺の口縁部で「く」字状に外反し、口縁端部は上方に延びる。

60、61の胎土は石英、長石などの砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈している。またこれ以外の土器は、いずれも外面に赤色顔料を塗り、胎土中に黒雲母、角閃石を多量に含んでいる。色調は褐色である。



第17図　本郷遺跡土器群3 出土遺物③（1/4）

73～84は高坏の完形品および破片である。73は坏部に稜をもち、口縁部は上方に立ち上がって端部

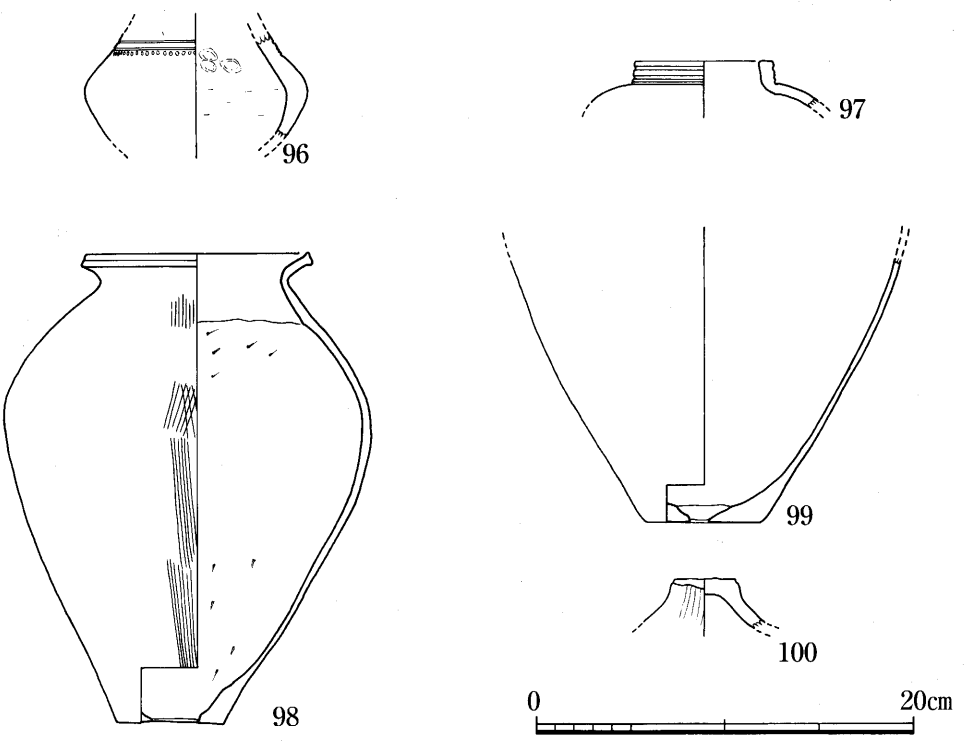


第18図　本郷遺跡土器群3 出土遺物④（1/4）

が肥厚している。端面には2条の沈線がめぐる。内外面ともヘラミガキ。74、75、76も坏部に稜をもち、口縁部は斜め上方に立ち上がる。口縁端部は肥厚している。74、75はほぼ完形で、74の大きさは坏部口径25.5cm、脚部径13.5cm、器高18.8cm、75の大きさは坏部口径24cm、脚部径13cm、器高13.7cmである。73、74、75とも坏部と脚部の間は、円盤充填法により接合されている。77は坏部に稜をもち、口縁部は斜め上方に外反して端部は丸くおさまる。78、79は口縁部に段をもち、端部は上方に立ち上がって丸くおさまる。80～84は脚部で、80、81、82の脚端部のように断面が三角形になるものと、83、84のように端部でゆるく屈曲して終わるものの二つに分かれる。いずれも外面には赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は暗褐色から褐色を呈している。

85～87は特殊壺の胴部破片である。85には3条の突帯が施され、突帯の上方には数条の沈線文が存在する。その上方には列点文がめぐり、突帯間には斜格子文が施されている。86は突帯の間に綾杉文が施されている。87は復元径が25cmとやや小形のもので、突帯の上方はやや膨らみをもち、ヘラミガキが施されている。いずれも外面に赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色を呈している。

88～95は小型特殊器台の破片と考えられる。口縁部の破片の88、89、90は、口縁帯にヘラ描きの平行沈線をめぐらしており、90はその後に鋸歯文が施されている。91、92は筒部下部から裾部にかけての破片と考えられる。ヘラ描き平行沈線の下方に列点文がめぐり、さらにその下方には鋸歯文が施されている。93～95は小型特殊器台の脚部と考えられる。3点とも脚直立部が短く、やや内傾している。裾部に平行沈線が施され、93ではその上側に鋸歯文が認められる。いずれも外面に赤色顔料が塗られ、胎土には黒雲母、角閃石が多量に含まれている。



第19図　本郷遺跡土器群４出土遺物（1/4）

６）土器群４（第19図）

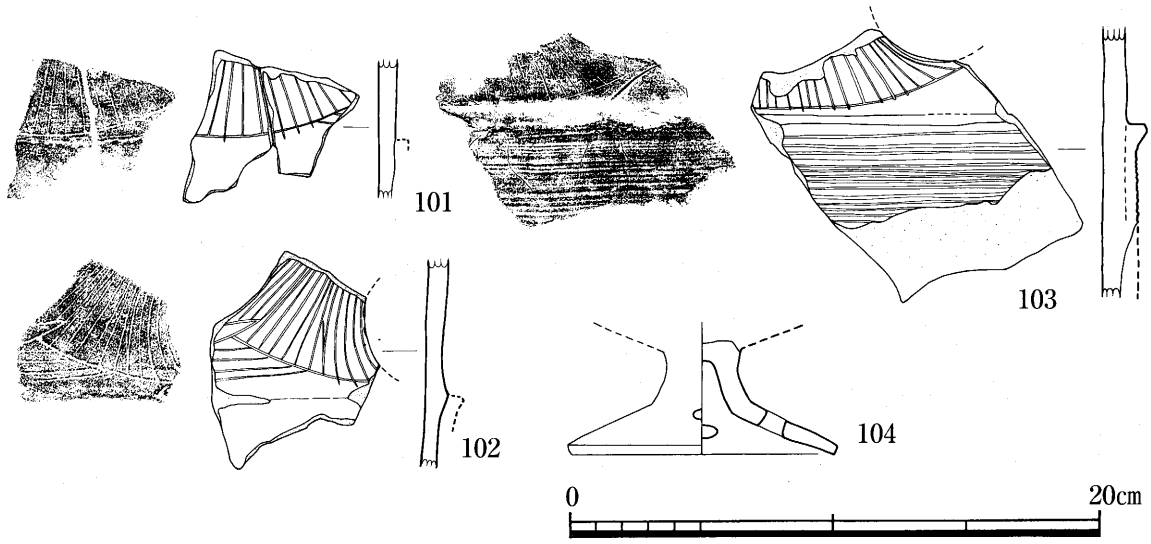
96～99は壺の破片である。96は胴部中央での最大径が約12cmの小形の壺で、算盤玉状を呈する。外面上端にヘラ描き沈線を施し、その下方に列点文がめぐる。内面はヘラケズリ。97は直口壺の口縁部で、口縁端部には３条の平行沈線が施されている。98はほぼ完形品で、器高25cm、口径12.3cm、底径5.8cmを測る。「く」字状に開く口縁で、端部は上下に拡張している。外面は縦ハケ、内面はヘラケズリである。底部は平底で、外側より径３cmの焼成後穿孔が施されている。99も壺の胴部から底部にかけての破片で、平底の底部に径１cmの焼成後穿孔が施されている。100は高坏の脚部で、短脚化が顕著である。外面には縦方向のヘラミガキが施されている。96、97は外面に赤色顔料が塗られている。また、胎土にはいずれも石英、長石を多く含み、少しの黒雲母を含んでいる。

７）特殊器台（第20、21図）

特殊器台の文様帯と間帯の破片は、表面採集された資料も含めて合計18点認められた。

前述したように、第20図の３点の文様帯は、本遺跡の発掘調査の契機となった特殊器台である。

101、102、103の３点の破片とも文様、胎土、色調などから同一個体のものと思われる。101、102は間帯が剥離しており、文様帯は扇形の単位を交互に配した文様と考えられる。103も同様の文様が施され、間帯には板状工具による平行沈線が施されている。102と103には円形ないしは巴形の透かし孔がみられる。内面はいずれも斜め上方向のヘラケズリである。104はこの特殊器台破片と一緒に



第20図　本郷遺跡表面採集遺物（1/3）

採集された高坏の脚部で、短脚化が進み、脚端部はやや端面をもち、円形の透かし孔が施されている。外面には赤色顔料が施され、胎土は特殊器台と同様なもので角閃石、黒雲母を多量に含み、色調は暗褐色を呈している。

調査で出土した特殊器台の破片は15点で、出土地区は１区、３区、４区の第Ⅱ層を中心に出土している。第21図105、106、107、108、109の5点は、109以外が１区出土の土器で、文様、胎土、色調などから同一個体と考えられる。105、106、107の文様帯は、S字状の沈線帯を縦方向に配した立坂b類文様[1]と思われる。108、109は間帯で上下両端に細い突帯を配し、その間にはヘラ描きの沈線の上面にナデを施している。内面は横方向のヘラケズリである。

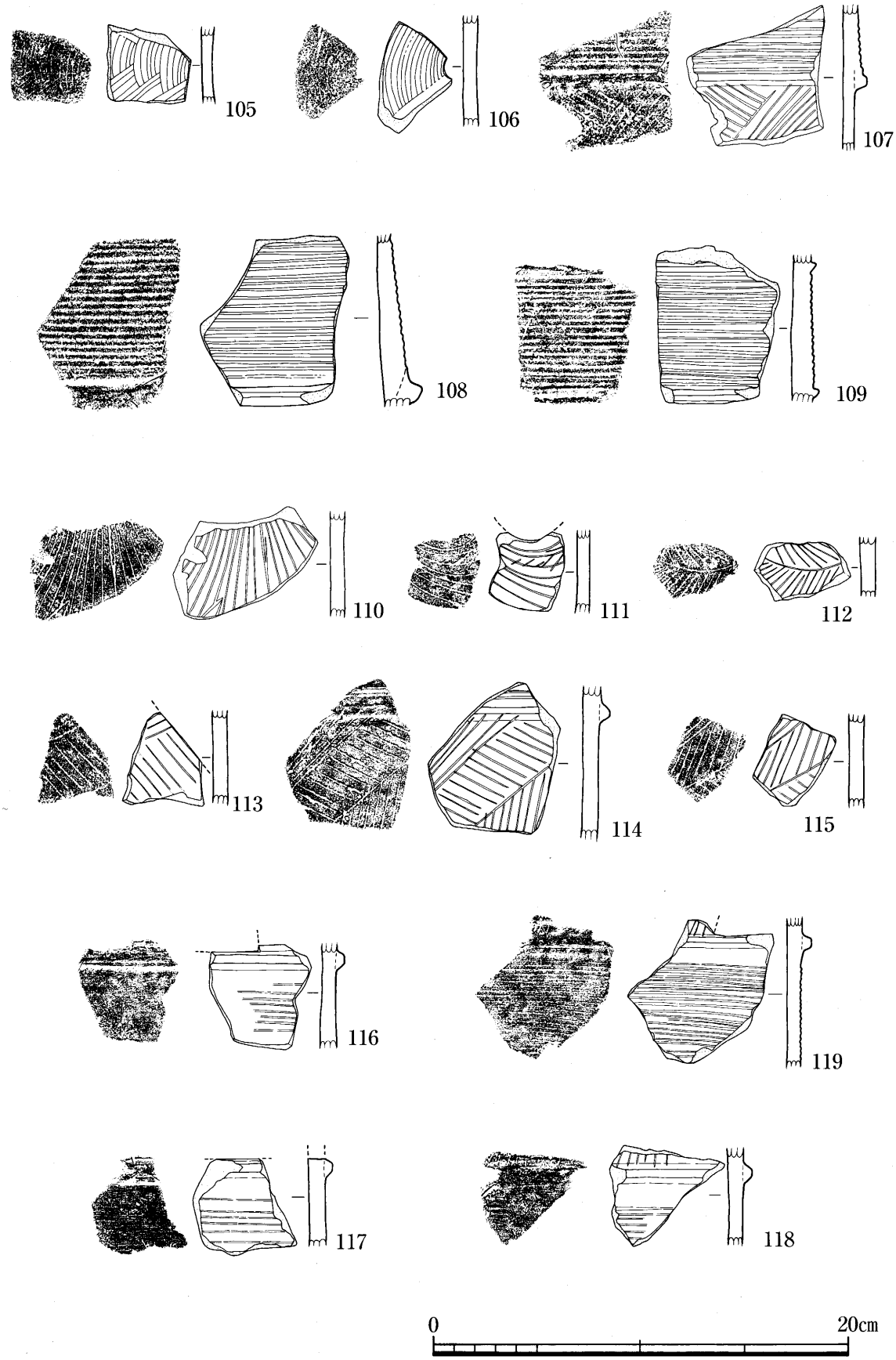
110は３区出土の文様帯の破片で、表面採集されたものと同様な扇形の文様と考えられる。

111～119の文様帯、間帯の破片は、４区からの出土でる。この特殊器台も文様、胎土、色調などから同一個体と考えられる。111～115の文様は小破片であるが、基本的にはS字帯の連続文で構成され、S字帯には綾杉文が充填され、その外側には平行する沈線が施されている。116～119は間帯の破片で、突帯を上下に貼り付け、その間には板状工具によりハケ目状の沈線が施されている。また、111、116、117、119は透かし孔部分の破片である。これらの特殊器台の胎土・色調は、基本的に黒雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色を呈している。１区出土のものは、肉眼観察ではあるが、胎土や色調が他の地区から出土したものとやや異なっていることがうかがえる。

4　小結

本遺跡では、明確な遺構は検出されなかったが、特殊器台、特殊壷や赤色顔料が塗られた壷、甕、高坏などの遺物が多量に出土した。以下、これらの遺構、遺物を整理し、所属時期などについて若干の考察を行いたい。

まず遺構では、３区から４区にかけて南北に延びる石列が認められた。この石列は、斜面下方向に対して貼り付いた状態で検出され、この石列より東側（県道側）を意識したように並べられているよ



第21図　本郷遺跡出土遺物特殊器台（1/3）

うであった。つまり、この石列より東側が墓域内というような、墓域境界ラインとしての石列と推測された。しかし、この東側は県道の拡張によってすでに消失しているため、埋葬主体などは不明である。このように、遺構の検出状況から推測されることを述べたが、これ以外には土器の集中区（土器群）が4か所確認された。土器群1では特殊壷、小型器台などが、土器群2では壷、甕、台付壷、高坏などが出土した。また、土器群3ではほかの土器群にくらべ、特殊壷、小型特殊器台、壷、甕、高坏、などが量的にまとまって出土した。土器群4は土器の出土量が少ないが、小型の壷などが出土している。以上のような土器群の検出状況から判断すると、土器の出土量が多い土器群の2と3は南北に延びる石列の延長上にほぼ並んでおり、この南北ライン付近に墓域との境界があったとみられ、この土器群は墓前祭祀の供献土器であったと想定される。

また、出土土器の時期であるが、各区および土器群の出土土器とも、壺、甕、高坏などの口縁部の形態や技法から、大きく二時期に分かれる。

1区、2区、3区出土の土器では、1、2、11～17とそれ以外の土器に大別される。

土器群では、45、46、53～55（土器群2）、60～62、73～76（土器群3）、96～99（土器群4）と、それ以外の土器に分かれる。そして、前者の時期として弥生時代後期の前半期、後者は後半期の時期にあたると考えられる(2)。

次に、文様構成、形態、技法、胎土観察などから、本遺跡より出土した特殊器台を検討すると、大きく3つの型式に分類が可能と思われる。宇垣匡雅氏の編年(3)に従うと、第21図105、106、107、108、109は第1型式（立坂型・楯築型）、第20図101、102、103、第21図110は第2型式（中山型）、第21図111～119は第3型式（向木見型）にそれぞれ属すると考えられる。

第５章　出土遺物の自然科学的分析

１　本郷遺跡出土土器の胎土分析

１）分析の目的

この胎土分析では、蛍光Ｘ線分析法によって、本郷遺跡出土の特殊器台、壺などの胎土分析を実施し、特殊器台の文様から３つの型式に分類できたが、この分類が胎土的にどのように相違するのか、また県内各遺跡出土の特殊器台と本遺跡の特殊器台が胎土的にどのようなまとまり、あるいは分布差をなすのか検討した。

なお、この胎土分析は、岡山県古代吉備文化財センターとの共同研究である。

２）分析結果

分析方法および装置、測定条件、試料の調整などは従来までの方法で行った。今回の分析試料は、第２表に示した41点の特殊器台、特殊壺などの土器について分析した。

分析の結果、従来通り、K、Ca、Sr、Rbの４元素でX－Y散布図を作成し、胎土の差異について検討した。そして、遺跡内出土の特殊器台、壺などの器種の差によって胎土に差があるかどうかでは、第22図K－Caの散布図から、複数のグループに分類が可能である。

まず、特殊器台は二つのグループに分かれ、一つは試料番号30～37で、もう一つは20～29のグループである。

また特殊壺、小型器台、壺の器種は、三つのグループに分かれた。一つは１、２、４、11、15、16で、二つ目は10、12、19、もう一つは５、６、７、13、14、17、18のグループである。また、第23図K－Ca散布図から、本遺跡出土の特殊器台と岡山県内出土の特殊器台の胎土を比較した。この結果、本郷遺跡の立坂型と中山型がほぼ一つにまとまり、向木見型の分布領域には鯉喰神社弥生墳丘墓、矢部南向遺跡、西江遺跡のものがまとまった。

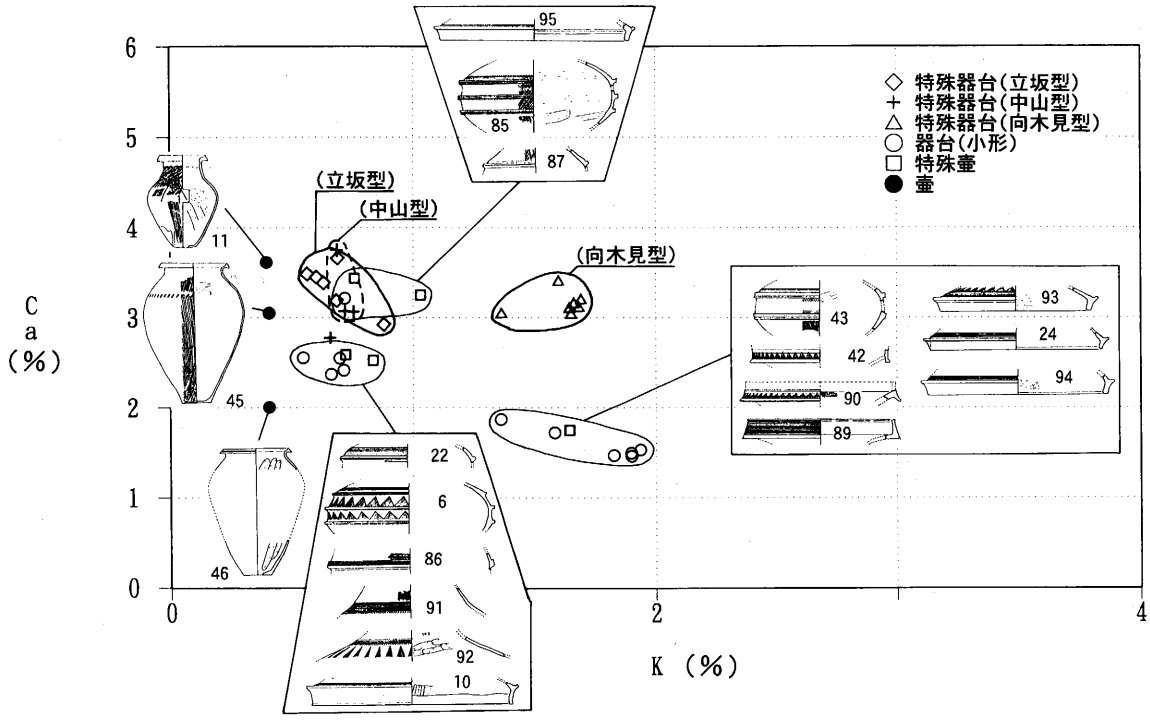
３）まとめ

以上のように、本郷遺跡出土の特殊器台、特殊壺、小型器台、壺の胎土分析を実施し、明らかになったことを述べてまとめとしたい。

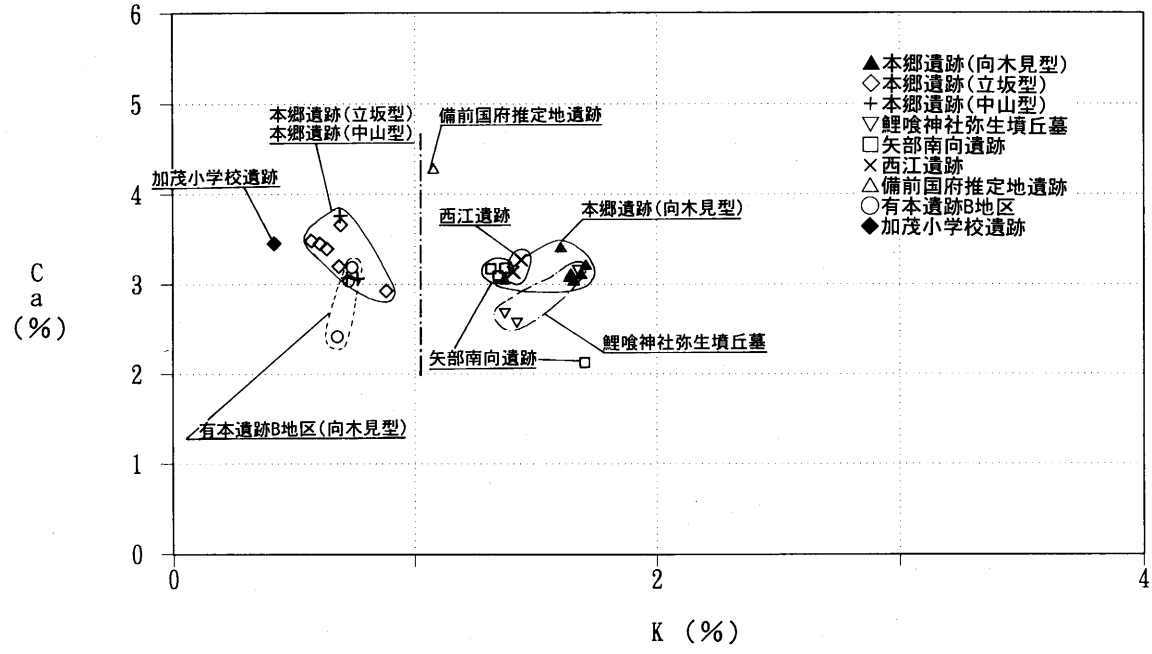
（１）本郷遺跡出土土器の間で胎土に差がみられるかどうかでは、特殊器台のなかで立坂型、中山型と向木見型の２型式の間で違いがみられた。また、その他の特殊壺、小型器台、壺では、３つのグループに分類された。

（２）他の遺跡から出土した特殊器台との比較では、本郷遺跡の向木見型と鯉喰神社弥生墳丘墓、矢部南向遺跡、西江遺跡の向木見型の特殊器台が、ほぼ同じ領域に分布した。

このように、特殊器台・壺などの胎土分析では、特殊器台の型式差によって胎土に差があることがわかった。また、向木見型のものは、胎土的にほぼ一つにまとまる傾向がみられた。



第22図　K－Ca散布図　本郷遺跡出土土器の比較



第23図　K－Ca散布図　岡山県内出土特殊器台の比較

第２表　胎土分析試料一覧表（％）ただし、Sr、Rbはppm.

番号	遺跡名	挿図番号	器　種	K	Ca	Sr	Rb	備　考
1	本郷遺跡	6	特殊壺	0.83	2.53	128	34	
2	本郷遺跡	10	特殊器台	0.54	2.55	108	29	
3	本郷遺跡	11	壺	0.40	3.62	165	28	
4	本郷遺跡	22	器台　胴部	0.70	2.56	103	34	
5	本郷遺跡	24	器台　脚部	1.89	1.46	121	68	
6	本郷遺跡	42	器台　口縁部	1.89	1.49	120	69	
7	本郷遺跡	43	特殊壺　胴部	1.64	1.73	118	63	
8	本郷遺跡	45	壺	0.41	3.05	128	14	
9	本郷遺跡	46	壺	0.40	2.00	81	23	
10	本郷遺跡	85	特殊壺	1.03	3.25	164	45	
11	本郷遺跡	86	特殊壺	0.72	2.58	105	44	
12	本郷遺跡	87	特殊壺	0.76	3.44	164	36	
13	本郷遺跡	89	器台	1.57	1.71	112	59	
14	本郷遺跡	90	器台	1.93	1.52	121	65	
15	本郷遺跡	91	器台	0.71	2.42	108	29	
16	本郷遺跡	92	器台	0.67	2.38	119	32	
17	本郷遺跡	93	小型器台　脚部	1.36	1.86	116	53	
18	本郷遺跡	94	小型器台　脚部	1.82	1.45	122	59	
19	本郷遺跡	95	小型器台　脚部	0.72	3.21	158	38	表採
20	本郷遺跡	101	特殊器台　文様	0.72	3.08	131	31	透かし孔、表採
21	本郷遺跡	102	特殊器台　文様	0.75	3.07	131	35	透かし孔、表採
22	本郷遺跡	103	特殊器台　文様	0.68	3.76	128	25	表採
23	本郷遺跡	104	高杯	0.66	2.78	163	33	
24	本郷遺跡	105	特殊器台　文様	0.61	3.45	128	24	
25	本郷遺跡	106	特殊器台　文様	0.57	3.47	139	27	
26	本郷遺跡	107	特殊器台　文様	0.63	3.38	130	24	間帯
27	本郷遺跡	108	特殊器台　文様	0.88	2.92	152	45	間帯
28	本郷遺跡	109	特殊器台　文様	0.69	3.19	139	31	
29	本郷遺跡	110	特殊器台　文様	0.69	3.68	124	34	透かし孔
30	本郷遺跡	111	特殊器台　文様	1.69	3.25	215	79	
31	本郷遺跡	112	特殊器台　文様	1.64	3.14	205	79	
32	本郷遺跡	115	特殊器台　文様	1.59	3.43	217	73	
33	本郷遺跡	113	特殊器台　文様	1.65	3.06	204	63	
34	本郷遺跡	114	特殊器台　文様	1.66	3.18	202	70	
35	本郷遺跡	119	特殊器台　文様	1.36	3.06	176	54	透かし孔、表採
36	本郷遺跡	117	特殊器台　文様	1.64	3.14	206	76	透かし孔、表採
37	本郷遺跡	118	特殊器台　文様	1.68	3.13	209	65	
38	西江遺跡		特殊器台	1.43	3.28	197	55	
39	西江遺跡		特殊器台	1.40	3.15	213	60	
40	西江遺跡		特殊器台	1.33	2.87	155	59	
41	西江遺跡		特殊壺	1.48	2.53	150	74	

第6章　まとめ

陣山、本郷両遺跡は、高梁川西岸の吉備高原西端部に位置し、陣山遺跡は縄文時代早期から前期にかけての遺物が出土し、本郷遺跡は弥生時代後期の墳墓と考えられる。これまで述べてきたように、同地域の縄文時代から弥生時代の詳細な調査は皆無に等しかったが、これら遺跡の調査で徐々にではあるが、この地域での遺跡の性格が把握されつつある。以下、これまでの内容を簡単に整理し、まとめとしたい。

陣山遺跡では、縄文時代早期から前期にかけての土器、石器が出土し、特に早期末～前期初頭の繊維土器は、山陰、北陸、東海地方との文化交流を示す資料で、本遺跡に生活痕跡を残した集団は、狩猟、採集の生活をしながら中国山地を移動していたと思われ、中継拠点的な遺跡と考えられないだろうか。また、表面採集品の尖頭器類は、縄文時代早期の石器とは剥片剥離技術が異なっており、やや古い様相がうかがえるが、中国山地での同時期の石器出土が少なく、比較検討資料に乏しいのが現状である。今後の資料蓄積を待ち、再検討したい。

本郷遺跡は明確な埋葬施設などは検出できなかったが、石列や出土遺物に吉備を代表する土器である特殊器台、特殊壺がなどが認められたことから、調査区外に埋葬主体が存在していた可能性があり、弥生時代後期の墳墓と推測される。また出土土器から、後期でも大きく前半と後半の時期に土器が分類され、複数の時期にわたって遺跡が存在していたことがうかがわれる(4)。

特殊器台は、文様、形態・技法的な検討から、立坂型、中山型、向木見型の3型式に分類され、少なくとも3個体の特殊器台が同遺跡には持ち込まれていたようである(5)。そして、理化学的な胎土分析で胎土に差がみられるかどうか検討したところ、胎土的には立坂型、中山型と向木見型の2つに分類された。また、向木見型の特殊器台の胎土は、本遺跡も含めて、鯉喰神社弥生墳丘墓、矢部南向遺跡、西江遺跡から出土の特殊器台とほぼ同じであった。このことは、草原孝典氏による特殊器台の外形比較で、立坂型は大きさや形態にかなり個体差があるが、向木見型では太さがほぼ一定で形態も規則的となることが指摘されている(6)ことと一致している。胎土的にも向木見型の特殊器台がほぼ同じ粘土を使用している傾向がみられることから、向木見型の特殊器台は特定の粘土により製作されたことが示唆される。また、向木見型では形態で規則的になり、加えて胎土的にも限定された粘土が使用されていることから、特定の限られた集団により製作されたことが考えられないだろうか。同型式の分析資料を蓄積し、再検討する必要がある。

以上のように、本郷遺跡のような中国山間部の小遺跡まで吉備南部の有力集団と繋がりがあったことが今回の調査で明らかとなった。本遺跡を残した小集団の集落や生産基盤など不明な点も多々あり、今後検討していかなければならない課題である。

註

(1) 宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究（上）』近藤義郎編　山陽新聞社 1992

(2) 詳細に個々の土器を検討すればもう少し細分が可能と考えられるが、各器種ごとに量的に揃っていないことからこれ以上の分類は控えたい。

(3) 註1

(4) 間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967
この墳墓群でも土器から複数の時期に分類されており、本郷遺跡出土土器とも時期的に非常に類似していることを高畑知功氏からご教示いただいた。

(5) 宇垣匡雅氏からご教示いただいた。

(6) 草原孝典ほか『長坂古墳群』岡山市教育委員会 1999

参考文献

近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 1967

近藤義郎ほか『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992

近藤義郎『新本立坂－立坂型特殊器台名祖遺跡の発掘－』新本立坂発掘調査団 1996

間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 1977

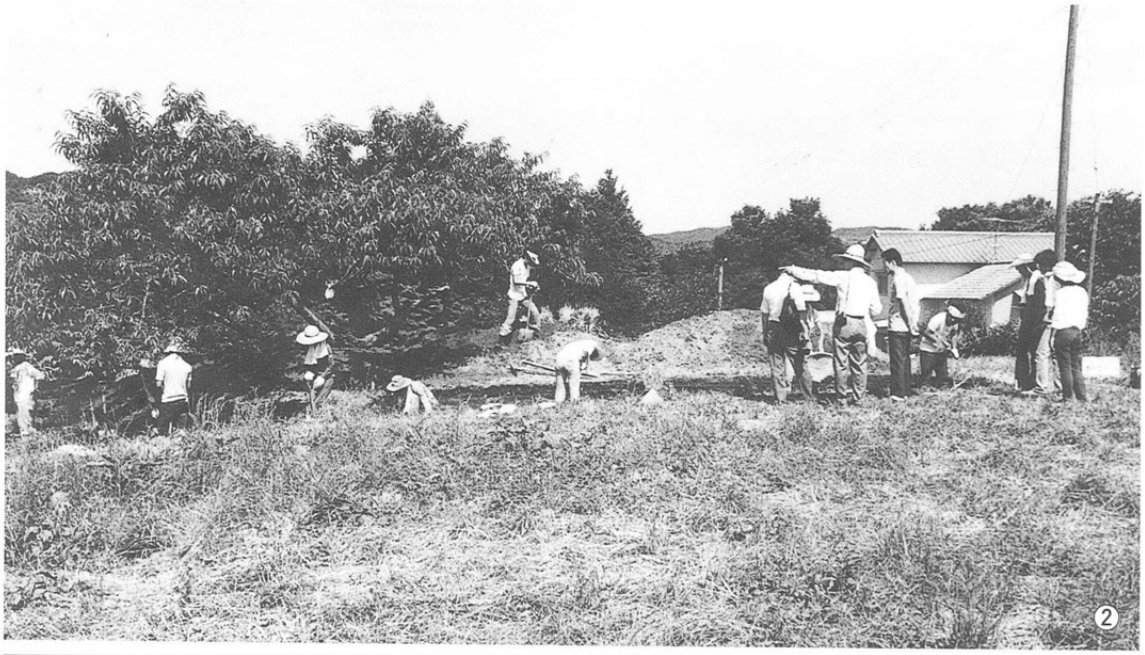
田仲満雄ほか「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20　岡山県教育委員会 1977

山磨康平ほか『中山遺跡』落合町教育委員会 1978

山磨康平ほか『西山遺跡』真備町教育委員会 1979

図　　版

1. 陣山遺跡調査風景
（西より）

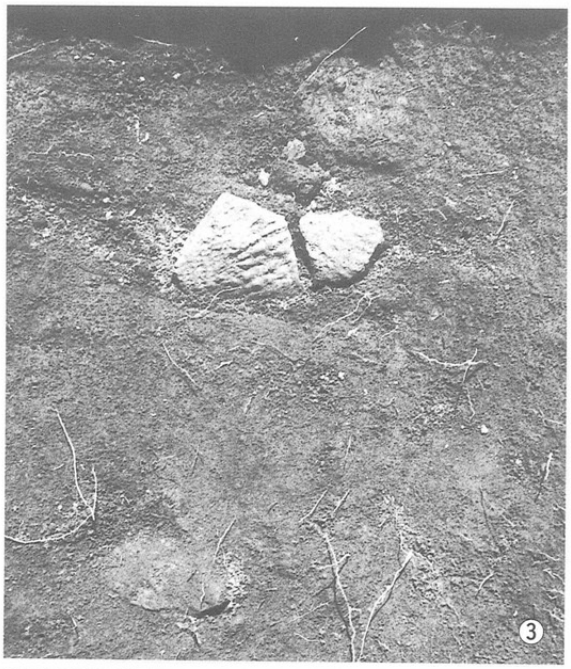


2. 陣山遺跡 調査風景
（東より）

3. 陣山遺跡
発掘区風景
（東より）

1. 陣山遺跡第１トレンチE区南西壁断面

2. 陣山遺跡第１トレンチE区南東壁断面



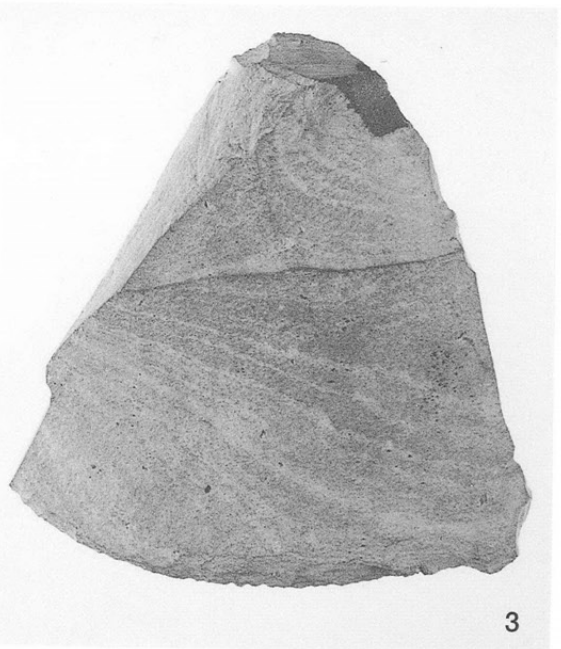
1. 陣山遺跡縄文土器出土状況　2. 陣山遺跡押型文土器出土状況　3. 陣山遺跡羽状縄文土器出土状況
4. 陣山遺跡スクレイパー出土状況　5. 陣山遺跡石器出土状況　6. 陣山遺跡尖頭器出土状況

1. 陣山遺跡表面採集
石器（表）

1

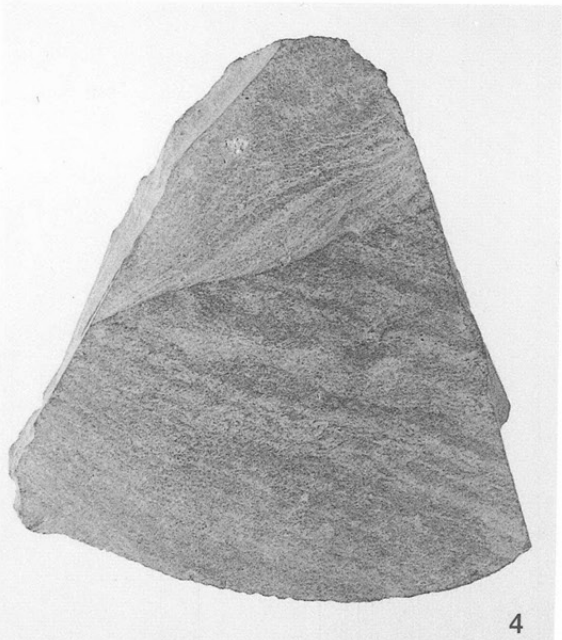
2. 陣山遺跡表面採集
石器（裏）

2



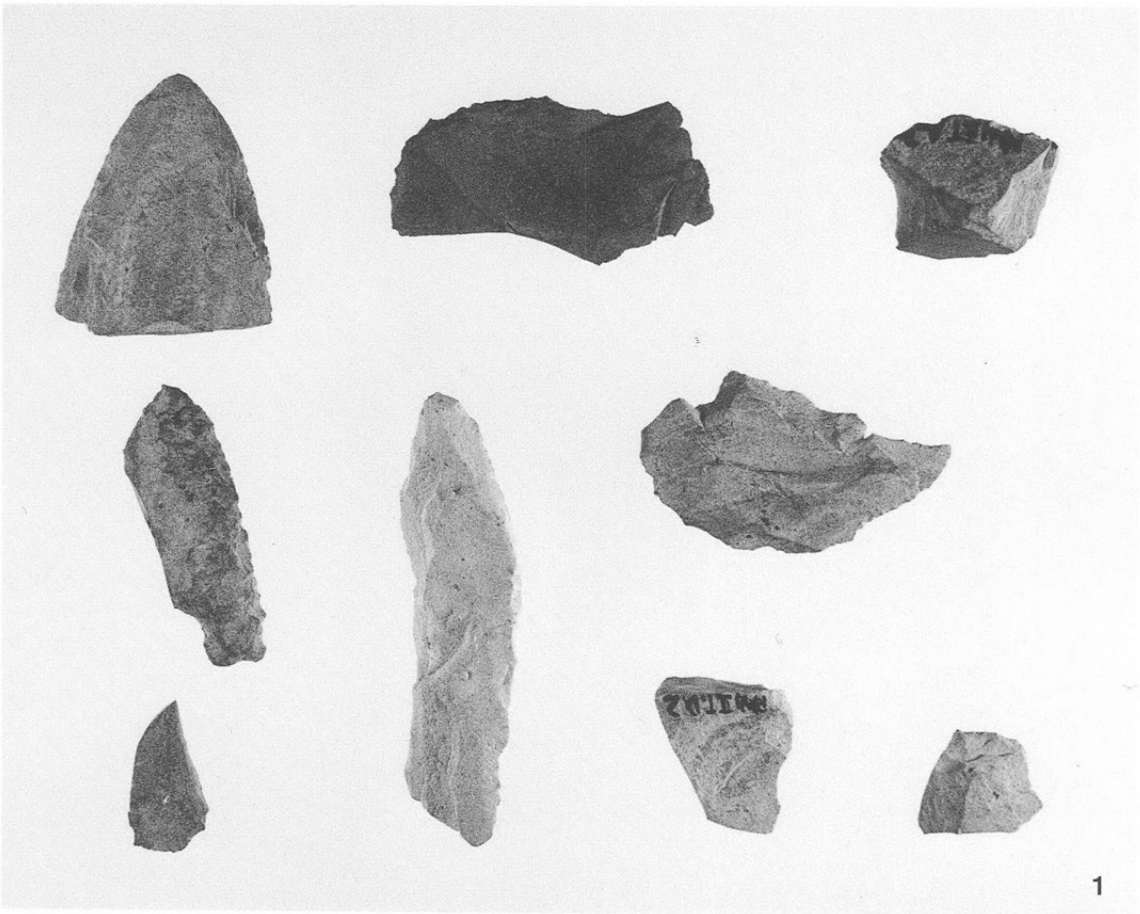
3. 陣山遺跡出土
スクレイパー（表）

3



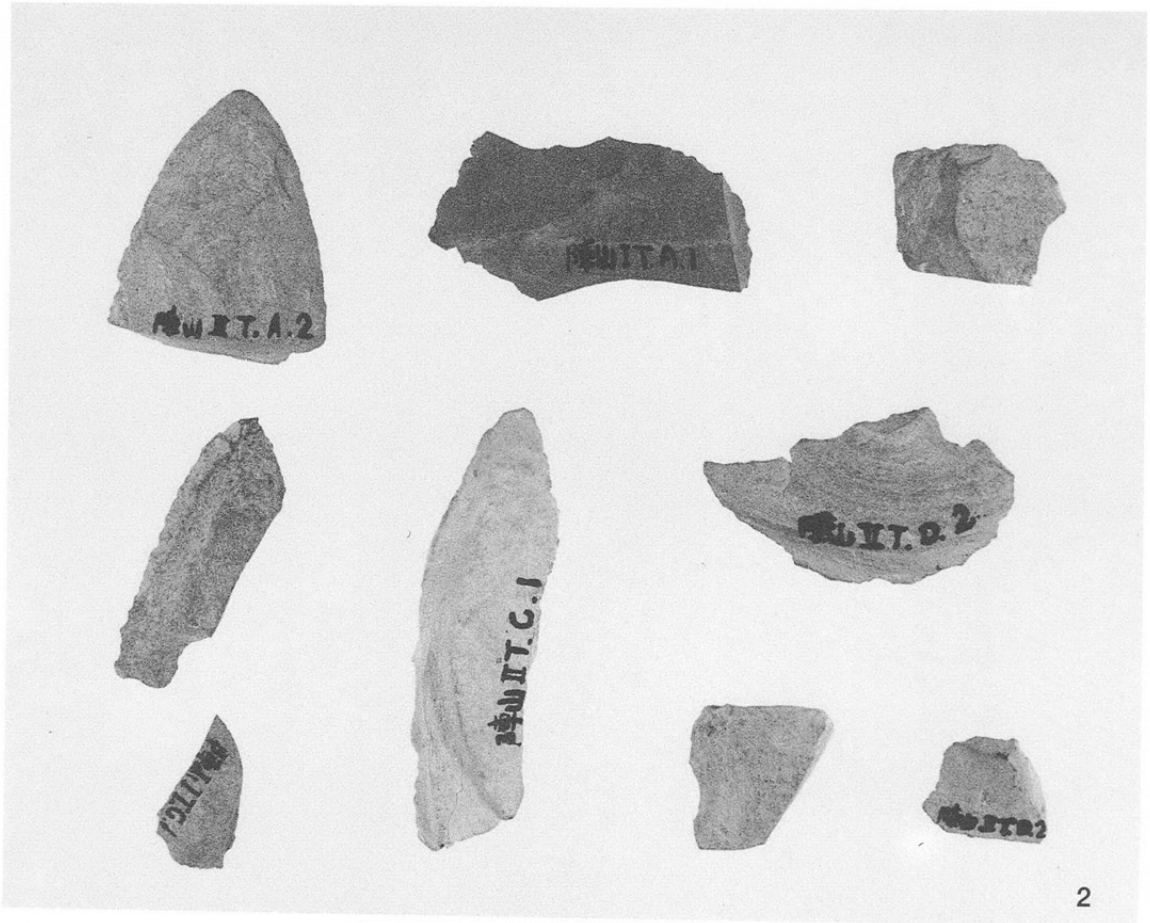
4. 陣山遺跡出土
スクレイパー（裏）

4



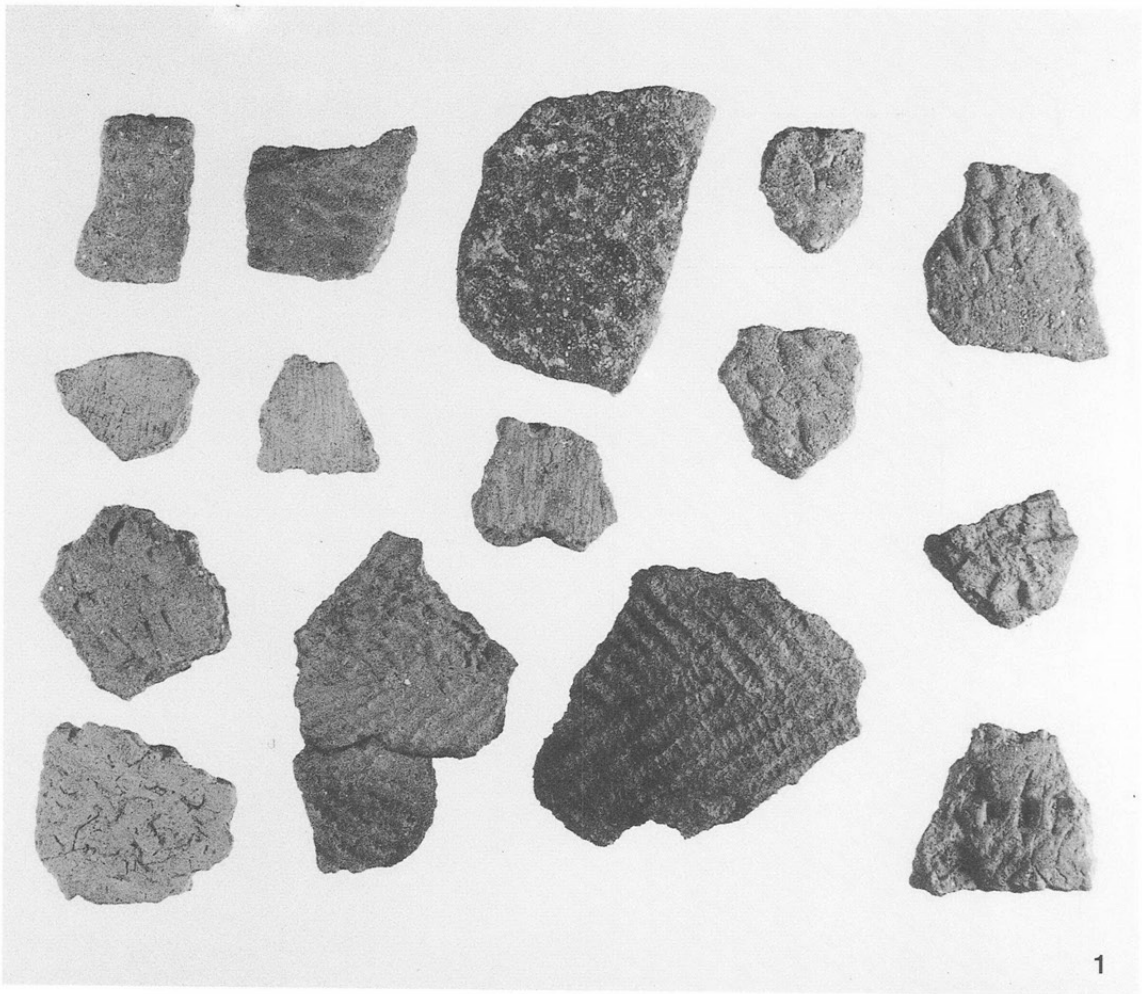
1

1. 陣山遺跡出土石器（表）

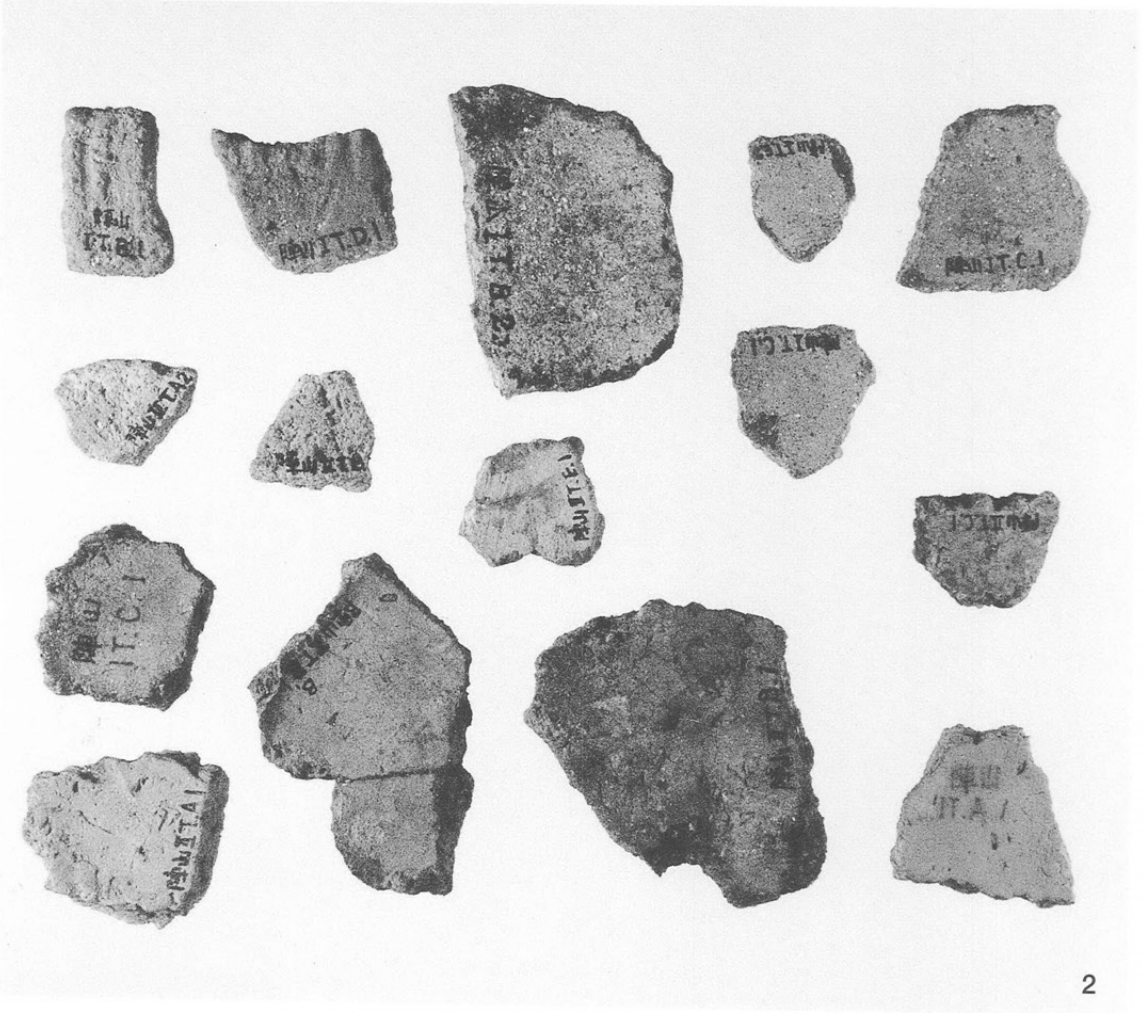


2

2. 陣山遺跡出土石器（裏）



1. 陣山遺跡出土
縄文土器（表）



2. 陣山遺跡出土
縄文土器（裏）

1. 本郷遺跡遠景
（南より）
1999年5月撮影

2. 本郷遺跡近景
（東より）

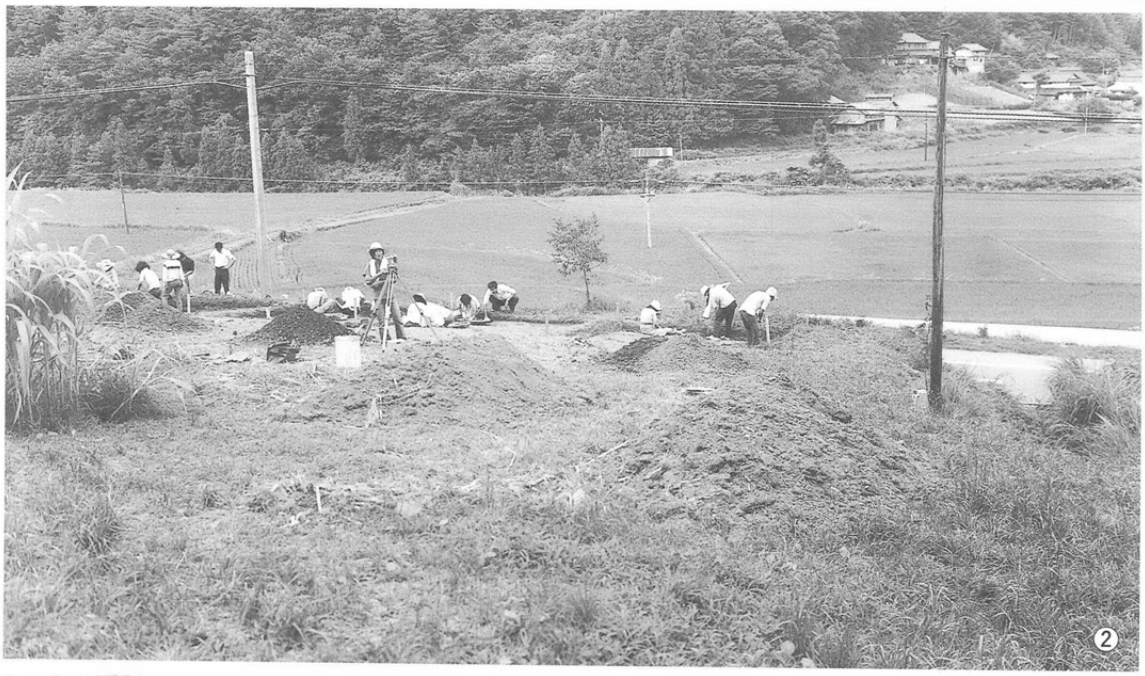
3. 本郷遺跡近景
（北東より）
1999年5月撮影

1. 本郷遺跡調査区設定（北より）

2. 本郷遺跡調査区設定（南西より）

3. 本郷遺跡調査風景（北より）

1. 本郷遺跡調査
風景
（北より）



2. 本郷遺跡調査
風景
（南西より）

3. 本郷遺跡調査区
土層断面
（西より）

1. 本郷遺跡石列
出土状況
（北より）

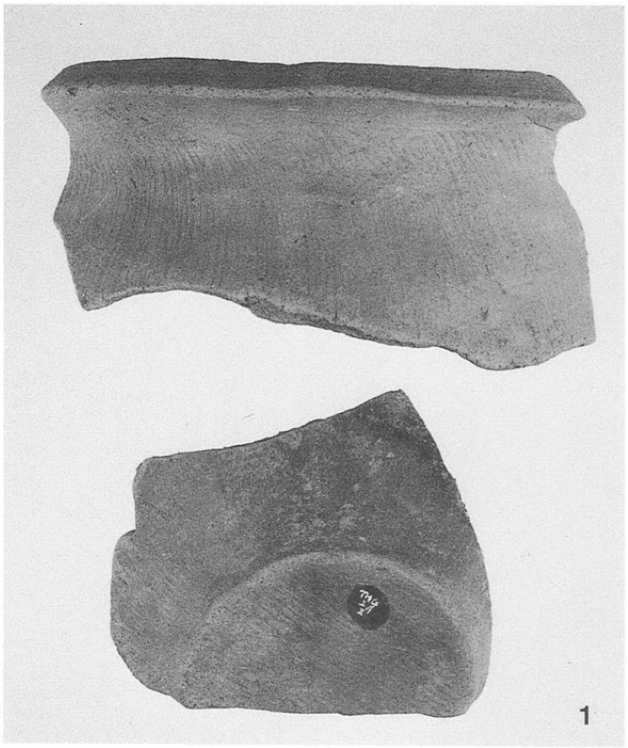
2. 本郷遺跡石列
出土状況
（西より）

3. 本郷遺跡３区
土器出土状況
（西より）

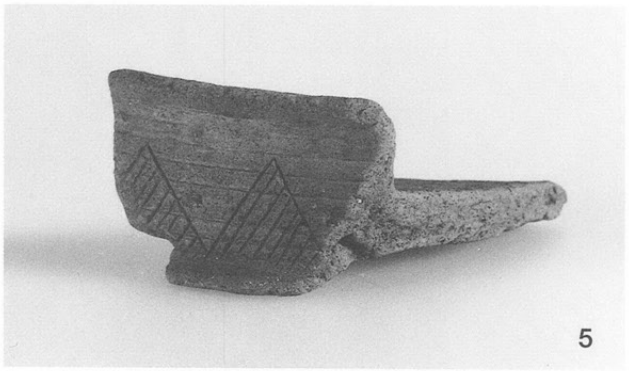
1. 本郷遺跡
土器群 2
出土状況
（南より）

2. 本郷遺跡
土器群 3
出土状況
（西より）

3. 本郷遺跡
土器群 3
出土状況
（西より）

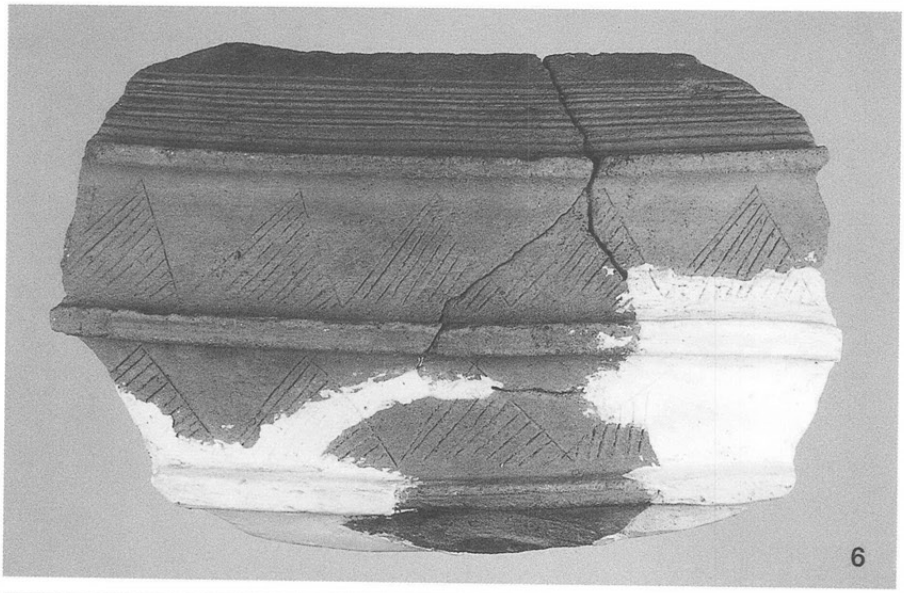

1

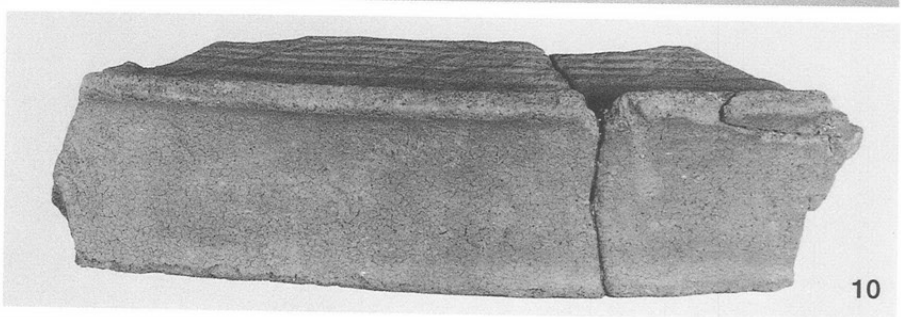
2


5

8

9

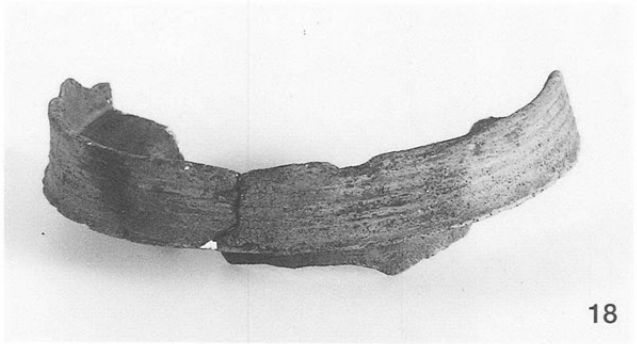

6

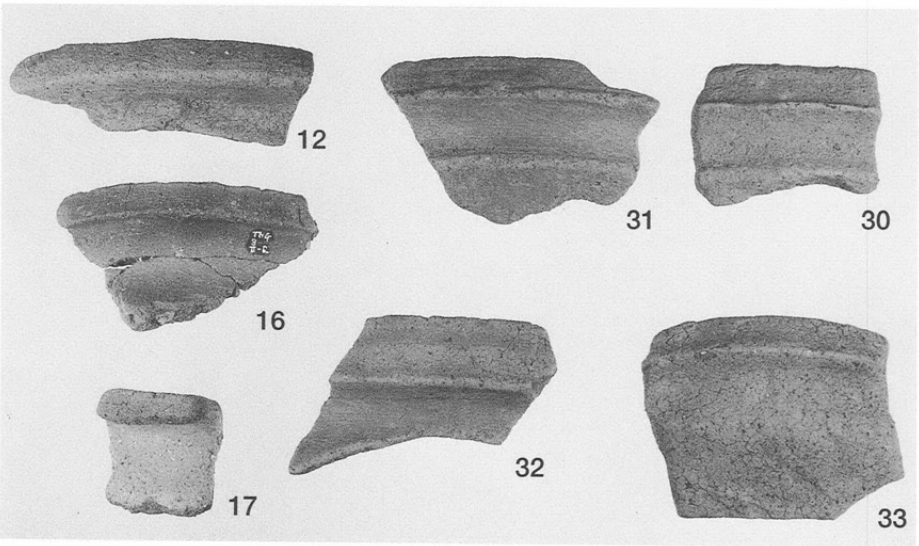

10

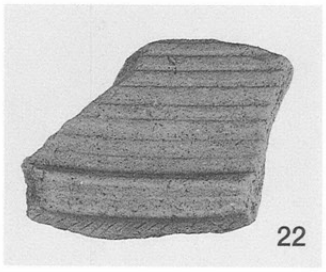
本郷遺跡１区、２区第Ⅰ・Ⅱ層出土土器

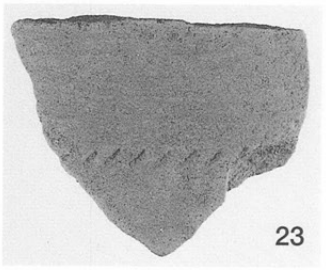
11

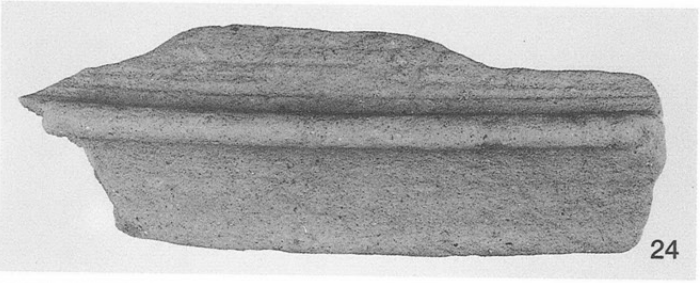
11

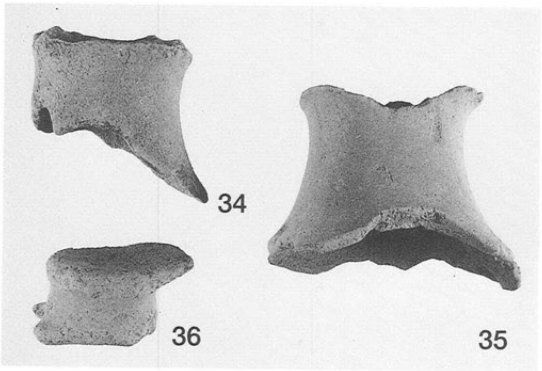

18

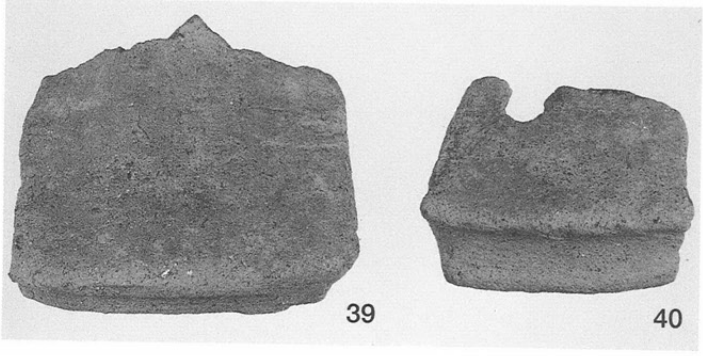

12
31
30
16
32
17
33


22


23


24


34
36
35


39
40

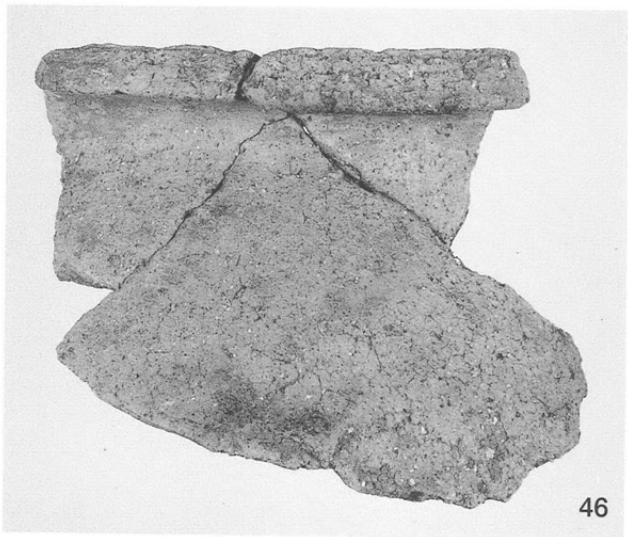
本郷遺跡３区第Ⅱ層出土土器

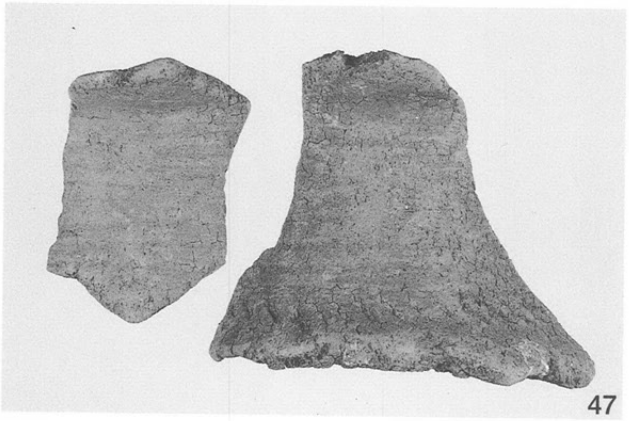
41

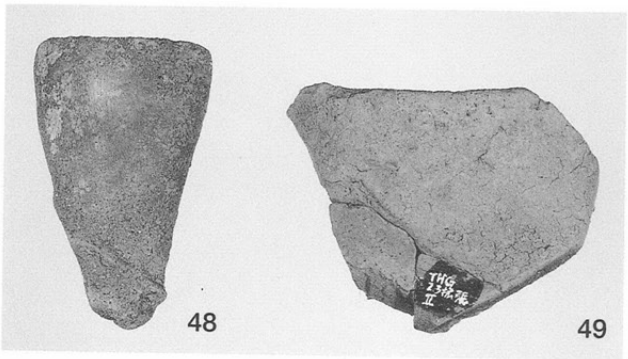
42

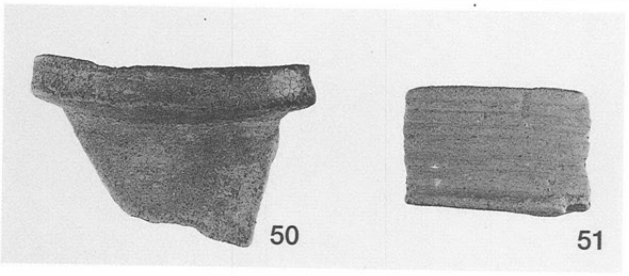
43

45


46


47


48
49


50
51

本郷遺跡土器群１、２出土土器

52

57

59

61

53

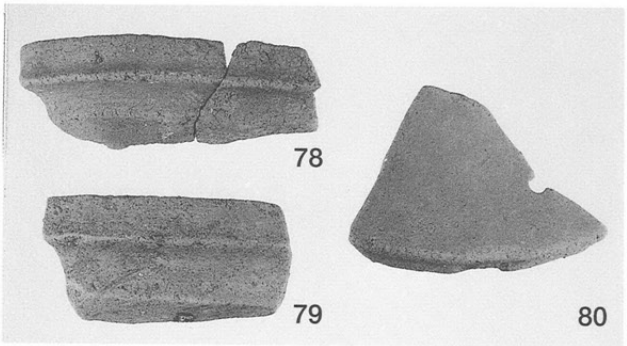
60

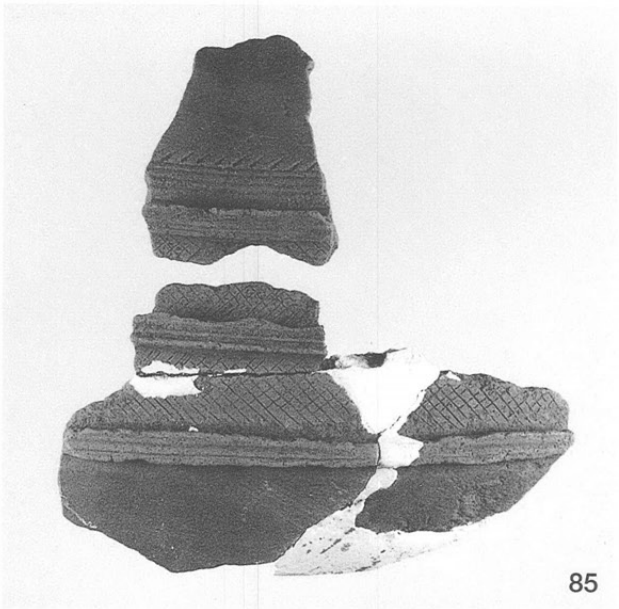
65

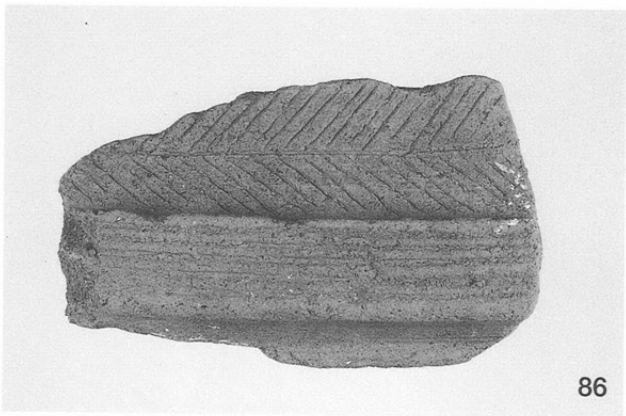
本郷遺跡土器群２、３出土土器

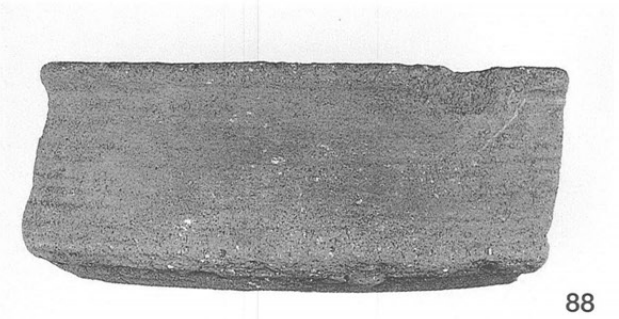
74

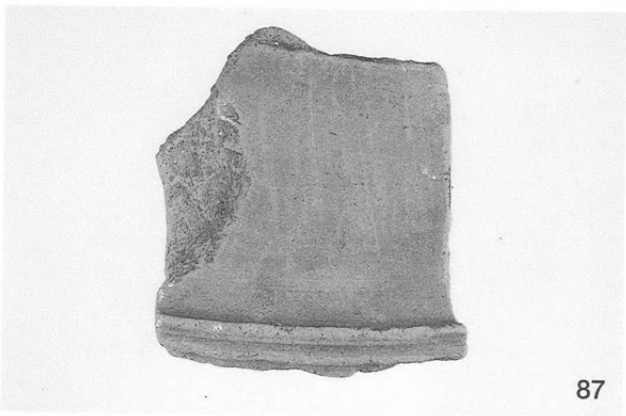
75


78
79
80

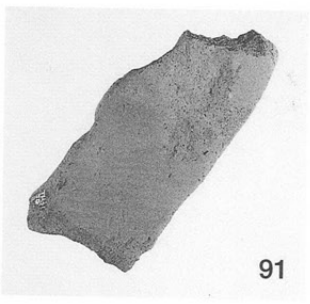

85

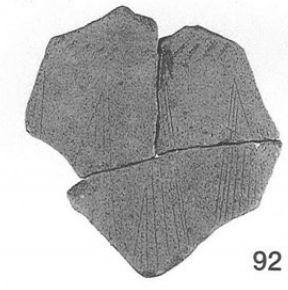

86

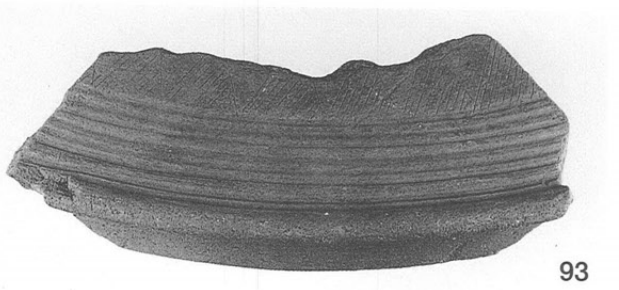

88


87

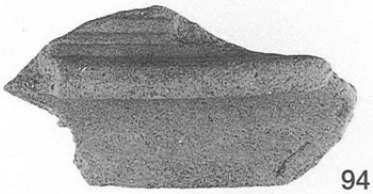
90


91

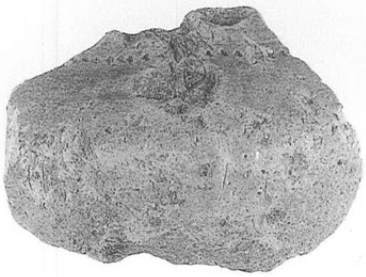

92


93

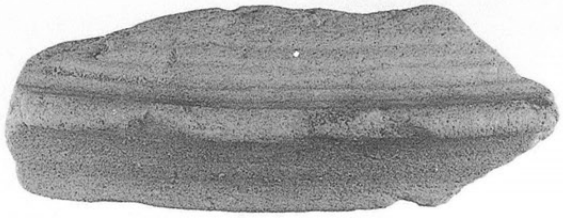
本郷遺跡土器群 3 出土土器



94



96



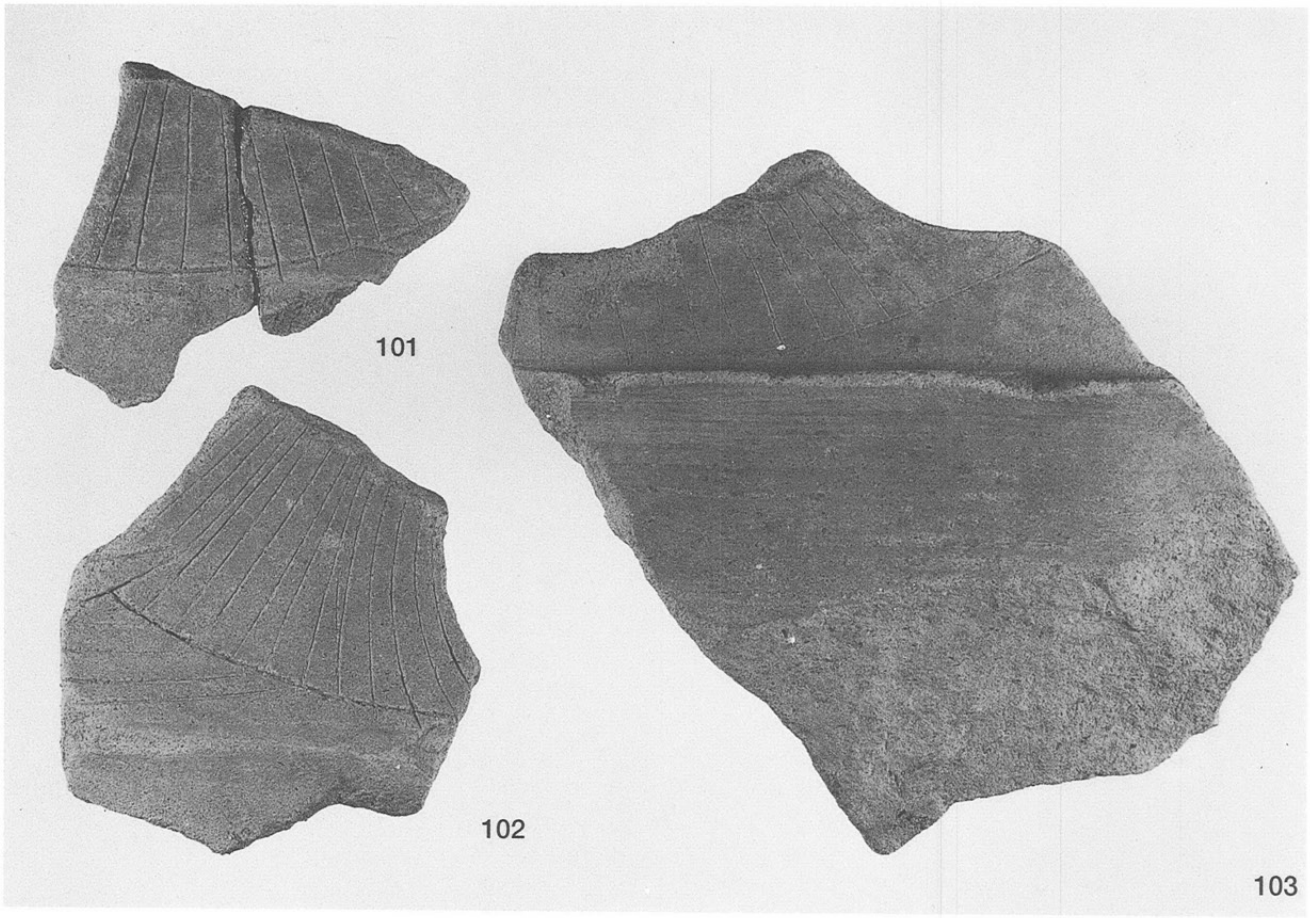
95

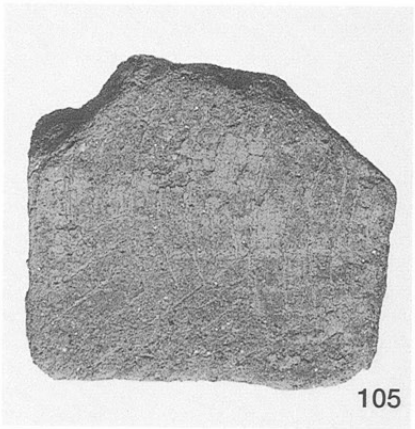
99

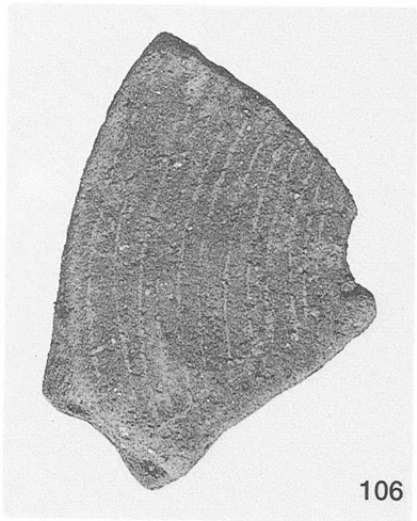
97

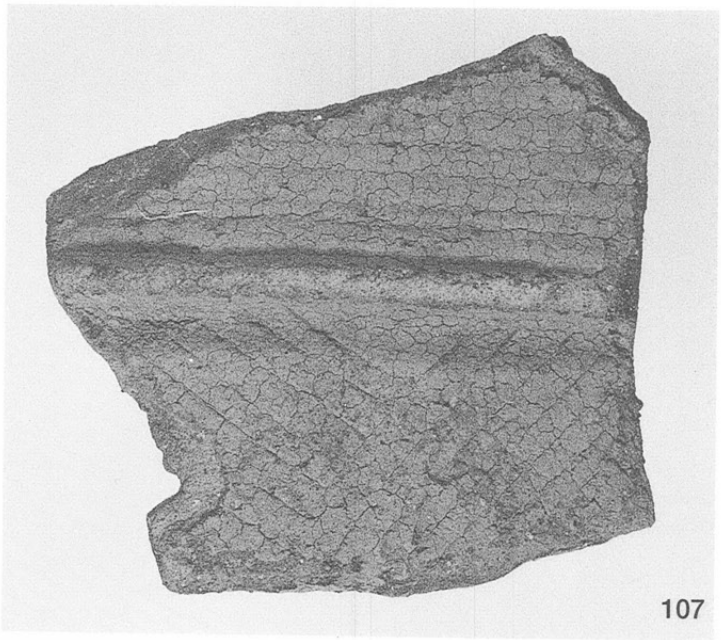
98

本郷遺跡土器群 3 、 4 出土土器

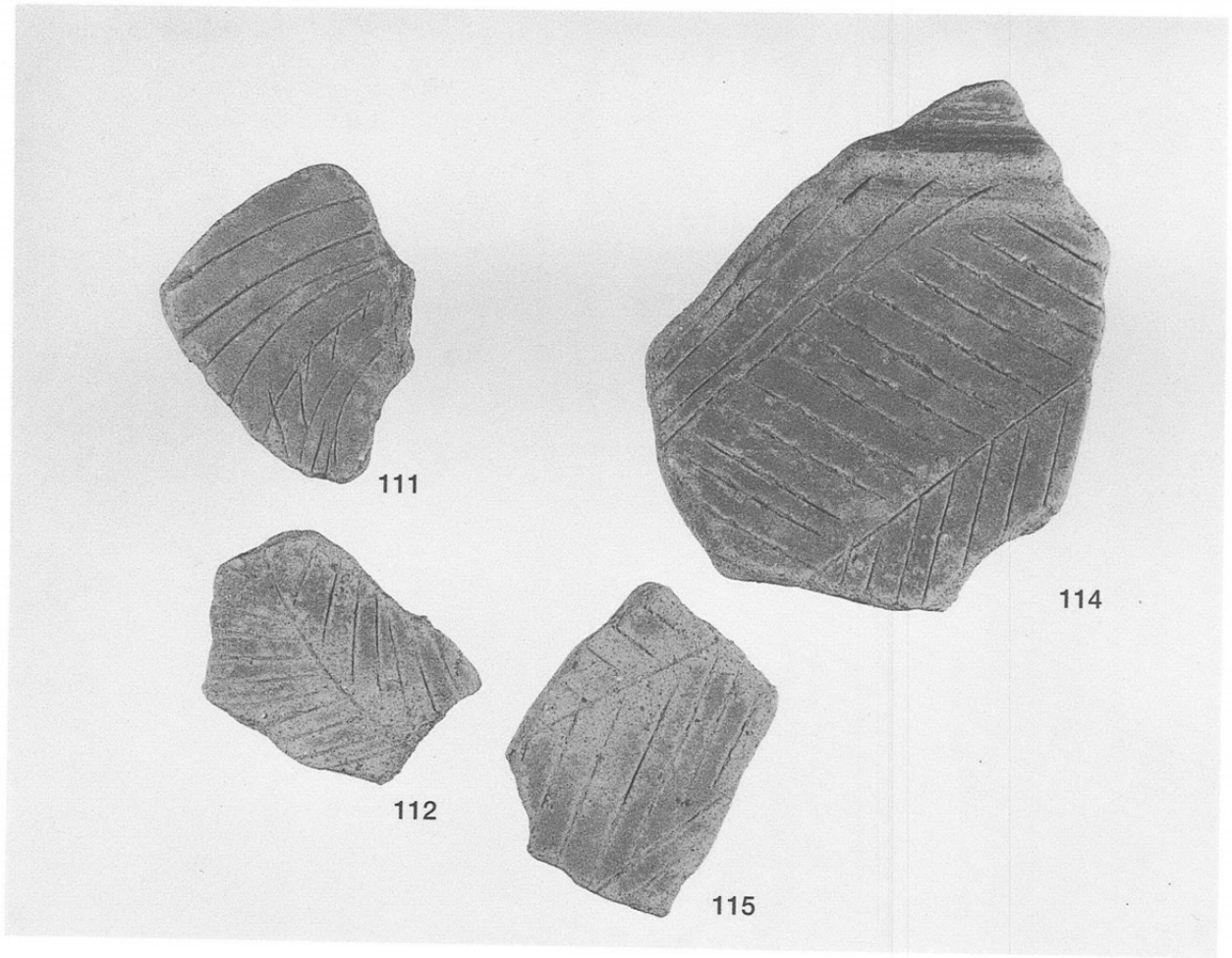








本郷遺跡表面採集および出土特殊器台



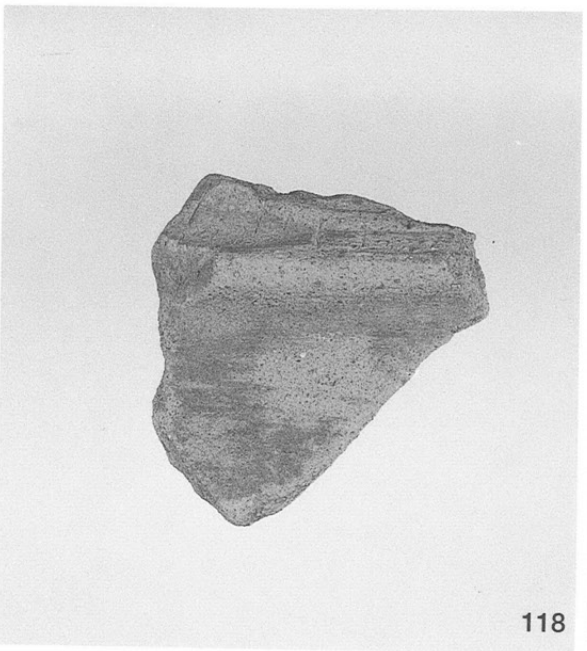
本郷遺跡出土特殊器台

110

113

116

117


118

119

本郷遺跡出土特殊器台

報告書抄録

ふりがな	じんやまいせき　　ほんごういせき
書名	陣山遺跡　　本郷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	高梁市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	白石　純　　森　宏之
編集機関	岡山県高梁市教育委員会
所在地	〒716−8501　岡山県高梁市松原通2117−1　　TEL 0866−21−0288
発行機関	岡山県高梁市教育委員会
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査期間 ㎡	調査原因
陣山遺跡 （じんやまいせき）	岡山県高梁市松原町陣山 （おかやまけんたかはしし しまつばらちょうじんやま）	33209		34度 49分 46秒	133度 32分 35秒	19750721〜 19750727	約160	高梁市史編纂による資料収集のため
本郷遺跡 （ほんごういせき）	岡山県高梁市宇治町本郷 （おかやまけんたかはしし うじちょうほんごう）	33209		34度 50分 16秒	133度 29分 16秒	19760716〜 19760723	約64	高梁市史編纂による資料収集のため

所収遺跡名	名種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陣山遺跡	集落	縄文時代		縄文土器 石器	山陰、北陸地方の繊維土器?
本郷遺跡	弥生墳墓	弥生時代	石列 土器群	特殊器台 特殊壺 弥生土器	墳墓?

高梁市埋蔵文化財発掘調査報告第2集

陣山遺跡
本郷遺跡

1999年3月31日発行

編集　岡山県高梁市教育委員会
発行　岡山県高梁市松原通2117−1

印刷　株式会社コーセイカン